
ゼロエターナル・オンライン

神盾零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロエターナル・オンライン

【Nコード】

N0788S

【作者名】

神楯零

【あらすじ】

世界屈指の大規模オンラインゲーム「ゼロエターナル・オンライン」。社会現象にもなったこのオンラインゲームには様々な噂があった。

ゲーム内で死亡するとプレイヤーはゲームに閉じ込められてしまう。

黒いモンスターに襲われとログアウトが出来なくなる。

そしてサービス開始から一年……誰もこのゲームをクリアした者は居ない。

ある日ゲームに興味の無い秋島終時は妹の梨依菜リーナに誘われ「ゼロエターナル・オンライン」にログインする。初めて体感するゲームの世界にシュージは関心を深めていく。そして二人は運命の渦に飲み込まれていく。

ゼロエターナル・オンライン……それはゲームの世界ではなかった。

毎週土曜午前8時に更新中です。

RealSideは不定期に更新させていただきます。

プロローグ「〇〇届かぬ想い」

プロローグ「〇〇届かぬ想い」

とある世界に……女の子が居ました。

誰にも見付けられず、誰にも逢えない女の子。

誰かを見付けては声を掛けます。でもその声は届か無いのです。

賑やかな世界……それなのに女の子は何処までも一人で、何処までも淋しかったのです。

そしてある時、異世界から旅人がやって来ます。

触れるコトも話すコトもできませんでしたが、彼等は彼女にとっては新鮮で見ているだけで楽しくなりました。

やがて女の子は想うようになります。旅人達がずっとここに居てくれますようにと……

これは悪いドラゴンや、悪い魔法使いを倒す物語ではありません。寂しい女の子は待っているのです。自分を救ってくれる勇者様を。ずっと……ずっと。永遠の虚無の中で。

Cord 1『ジョブ・スレッド』

ラクサ『管理人のラクサです。このスレッドはゼロエタのジョブについての長所や短所を語るスレです。荒らしや煽る者や反応する者も荒らしとしてアクセス規制をさせていただきます』

剣士野郎『なんだかんだ言っただけで最強じゃね？ パラメータは魔法攻撃と防御以外伸びやすいし。ソロでも十分にやれんじゃん』
イル太郎『剣士で……ww。遅いし、地味じゃん(。。(。』
イルズ『地味だけど弱くはないだろ。俺も剣士だけど、ソロでも死にくいし、PTには要るだろ』

剣士野郎『だろ？ シンプルイズベストだぜ』

エルビス『大剣士の方がパワーがあつていいと思う』

ジルエ『遅いの嫌い……確かに固いけど……』

イル太郎『ww。銃士だろー。遠距離からバンバン撃てたのすい

ー\o^/』

リックス『剣士馬鹿にすんな。私は銃士ですけど。敵に近寄らない限り安全だし、魔法耐性つければ無敵！ でも双剣士にやられた

〜』

イリーズ『ださっ』

リーズ『PK?』

リックス『んにゃ。返り討ち。早過ぎんだよー。双剣士』

剣士野郎『速さ取り柄じゃん。攻撃力もトップクラスだしな。防御

力紙だけどww』

イウエン『魔術師はどうかの？ 遠距離においては最強じゃぞ』

任人知『防御力と鈍いのに目をつむればイケますね。攻撃範囲も広いですし』

しなくちさん『治術師してる人はあんまり見ないですけど、PTに

は欠かせないですよね』

ガードン『治術師になったらモテモテになかも』

イル太郎『うは（。o。o。）＼（-|-）100%??（。Q。）?
?むり』

蒼樹『槍士でしょ』

イル太郎『うえ??（。Q。）??。蒼樹さま降臨（ノ。o。）
ノ』

ミズリ『本人?』

蒼樹『偽物扱い（T-T）。本人ですよ。槍士はいいですよ。攻撃
範囲とリーチは随一です。それと皆さんはジョブ全て言えますか』

リックス『《剣士》^{ソードユザ}《双剣士》^{ツインソード}《大剣士》^{ブレイド}《銃士》^{ガンナー}《槍士》^{ランサー}《拳士》^{モンク}
^{マジックユザベラー}魔術師治術師

エクステンドジョブになるとまだあるけど基本はそれだけだよな』

蒼樹『《魔法剣士》（マジックナイト）』

剣士野郎『なんだソレ』

ミルバ『都市伝説かと思ってましたけど……実際にあるんですか?』

蒼樹『あるよ。パラメータは微妙だけどね』

剣士野郎『器用貧乏になるジョブじゃねーの。魔法も剣も中途半端
じゃん』

蒼樹『どうか。僕は評価するけどね。プレイヤー次第によっては
最強になり得ると思う。ジョブエクステンドも気になる』

リックス『魔法剣士になる方法とか知ってる』

蒼樹『うん。それは』

イル太郎『はよ（ノ。o。）ノ言え』

『この書き込みは管理人より削除されました』

イル太郎『（?|?）なに?』

リックス『うあ。管理人何してんだよ!』

『この書き込みは管理人によって削除されました』

イル太郎『氏ね。〇（ハ・ハ）〇管理人』剣士野郎『気になるなあ』
イウエン『ガセネタだろ。蒼樹さん。そうゆうのも好きだし』
リックス『まあ仕方ないな』

Access 1「物語の始まり」

Access 1「物語の始まり」

目の前に居るのは異形のモノ。モンスターと呼ばれるソレは人の恐怖を煽る外見をしている。それに対して臆す事無く剣を構える。

「……………」

言葉……等戦いにおいては無意味。そこでは剣とチカラだけの世界。純粹に強い者が生き残り、次へと進める無情な世界……故に、考える必要は無い。今必要なのは相手を冷静に屠れる腕と、動きを見る目だけで十二分。

「俊刃斬^{しんぱんざん}!!」

疾風の如く駆け抜け、モンスターを一刀両断。そこに容赦等無い。

「……………ふっ」

「なあに雑魚^{スケル}に技使^{テクニック}ってんのよお!」

いつの間にか後ろに居た女の子に殴られる。そこに容赦はなかった。

「いつてえ…………何すんだよ? 梨依菜^{りいな}」

梨依菜と呼ばれた女の子はますます頬を膨らませる。

小顔にぱっちりとした瞳は無邪気なように見えて生意気そう印象も受ける。長い金髪を二つに分けている。軽そうな布鎧に腰には双剣。この世界では《双剣士^{ツインソード}》と呼ばれる職業だ。

「ここではリーナって呼んでって言うてるでしょ? シュージお兄ちゃん!」

シュージと呼ばれた青年は、苦笑いを作る。

端正な顔立ちをしているのだがその表情は真剣味が薄く、締まりが無い。服装は急所となる部分に装甲でそれ以外は布地の服だ。装飾の為か蒼いマントを羽織っている。手には先程モンスターを倒し

た剣が握られていた。シュージはこの世界では《剣士》と呼ばれる職業だ。

「細かいな。ゲームなんだから適当でいいじゃん」

シュージこと秋島終時あきしましゅうじはやれやれと肩を竦める。

「ゲームだからこそ真剣にやるんだよっ」

「……………」

シュージは再び肩を竦める。

そうこれはゲーム。しかも言う所のオンラインゲームである。

『ゼロエターナル・オンライン』。日本……いや世界規模での大人気オンラインゲーム。ユーザー数は一億人以上居て、日本では知らない人は居ない。

ゲームに全くと言っていい程興味の無いシュージでも名前くらいは知っていたがやる事は無いだろうと思っていた。

発端は先日的事だ。

「えへへ」

「どうした？ やけに機嫌がいいな」

終時は、梨依菜の車椅子を押しながら尋ねる。朝からそわそわしていたので気になっていたのだ。

「へへ……聞いて驚かないですよ？」

やけに勿体振ってこちらを見上げてくる梨依菜。

「いいから言えよ……」

「じゃあ、言うよ？ 覚悟はいい？」

「覚悟がいんのかよ……」

終時は呆れ顔を作りつつ、そこまで勿体振る程の事かと期待していた。

梨依菜は生まれつきの病気による下半身不随。それに加え複数の障害を抱えている。寝たきりで学校にも行けない。その為か梨依菜は何に対しても冷めた態度を取る事が多い。

そんな妹が、ここまで言うモノとは何か……気にならない方がおかしい。

「それはね……なんと……」

「……………」

「ゼロエターナル・オンラインのソフトと、ユーザーアカウントをゲットしたんだよ!!」

「……………」

終時に浮かんだのは驚きでは無く疑問符だった。

ゼロエターナル・オンライン? ……何だソレ?

「いやゝ予約一杯のソフトが手に入ってるなんて……アタシってやっぱりゲームの神様に選ばれてるんだよゝ」

興奮ここに極めりと言う梨依菜と対象的に、終時はひたすら脳内で検索をかけていた。

ゼロエターナル・オンライン……聞いた事はあるんだよねゝ。

疑問符を浮かべたままの終時を尻目に更に梨依菜はまくし立てる。
「超名作をプレイ出来るなんて最高だよゝ ああゝ生きててよかったあゝ」

歡喜ここに極めりと言った梨依菜に対し、終時はようやく思い出す。

……ああ。クラスの奴が言ってたゲームの事が。

何だ……ゲームかよ……

少し落胆する。梨依菜のゲーム好きは今に始まった事では無い。かなり昔、終時が退屈そうにして梨依菜に渡した携帯用のゲームがキツカケだった。

三度の飯よりゲームが好き。女の子とは思えない有様に終時は責任を感じざるを負えない。

「アカウントは二人分丁度余ってるなんてもうこれは運命! そうに決まってるよ!」

「……………」

でもまあ……梨依菜は楽しそうだからいいか……って二人分?

「……待て。それってオレもやるのか？」

恐る恐る尋ねる終時。それに対して梨依菜は、

「うん！」

そんなの当たり前でしょと言わんばかりの笑顔だった。

「オレはゲームなんてしないって言ってるだろ？」

「やって……くれないの？」

上眼使いで瞳をうるうるさせて覗き込んでくる梨依菜。

（実の妹にそんな事やられてもな……）

残念ながらちつとも終時の心は動かなかった。

「やらないったらやらない」

「……どうしても」

「ああ」

少し強くそう梨依菜に伝える。兄として少し厳しく言わないとな。

「……………」

俯く梨依菜。ヤバイ……流石に言い過ぎたかと、心配になる終時。

「……………」

「う？」

壮絶に嫌な予感。

「うわああーん！！」

大声で泣き始めた。断っておくところは道路。公共の場である。

周りの眼が痛い！

「お、おい！ 梨依菜……」

「うわああーん！！ 死んでやる！ 遊んでくれないと、舌嚙んで死

んじゃうー！！」

「や、止めろって！ 道のど真ん中でそんな不穏な事を……」

「うああああーん！！ 死んじゃう死んじゃう死んじゃうもん！！」

駄々をこねる子供のように と言うか子供そのものだ 手を

バタバタさせる梨依菜。その姿は可愛いらしくもあるが言ってる事

はかなりタチが悪い。

「死んじゃうモン！！ 本気だよ！？ 本気なんだからね！？」

「分かった！ 分かったから！」

「う……ぐす、ホントに？」

「ああ……遊んでやるから、泣き止んでくれ」

不審者扱いされて通報されるのは流石にごめん被る。

「うん。泣き止む」

けろりと何事もなかったように笑顔になる梨依菜。

「嘘泣きかよー！」

「違う違う。感情の移り変わりが激しいだけだよ」

「情緒不安定だろ……ソレ」

一刻も早く精神科に行くべきだ。

「ま。それはともかく早く帰えろっ」

騙された。終時はそう思ったが口には出さない。

（ま……たまにはいいか）

上機嫌な梨依菜の機嫌を損ねるのも賢明じゃない。

騙された思っただけやらない。もしかして面白いかも知れない。

そう終時も珍しくそう思った。

わたしはこの時……知らなかった。もう物語が始まっていた事に

……アタシとお兄ちゃんは既に巻き込まれていたのかも知れない。

こうして……世界を救う物語は始まったのです。

A c c e s s 2「初めてのログイン」

A c c e s s 2「初めてのログイン」

「ネット接続はしてあるから、後はソフトをインストールするだけだよ」

鼻歌混じりに部屋に先に入る梨依菜。

「……………」

梨依菜の部屋は相も変わらず混沌としていた。漫画や雑誌が本棚にぎっしり入っていて、ゲームやCD……更にフィギュアが至る所に乱立する。女の子らしさのカケラも無い。

「……今度部屋片付けさせろ」

「ええ〜？ 駄目だよ。女の子の部屋なんだと思ってるの？」

「少なくともここは女の子の部屋じゃない」

どちらかと言えばオタクな男子の部屋だ。一瞬、18禁と書かれたゲームが視界に入ったが見なかった事にした。

「ほらほら早く」

「はあ……………」

女の子がこれでいいのかと思いつつ、梨依菜を抱えベットに降ろす。

「今日は両腕動くのか」

「うん。今日は調子いいよ」

鼻歌混じりに今度はパソコンを操作する。終時は機械音痴の為電源の入れ方さえ分からない。ディスクを本体に挿入して暫く待つ。

「説明書とかは？」

「アタシが説明してあげるからいいの」

暫くして現れたのは、

『ZeroEternal ON-LINE』

と言う素っ気ない画面だった。

「来た来た　お兄ちゃんもこれつけて」

そう言っただ渡されたのはゴーグルのようなモノ。パソコン本体と繋がっていた。

「何コレ？」

「コントローラーだよ。思った通りにキャラを操作出来るんだよ。まるでゲームの中に入ってるみたいなんだよ」

「マジで！？　今の技術凄いな……」

本気で感心する終時に梨依菜は呆れ顔。しかしほんの少し嬉しそうに説明する。

「今ではこれが当たり前なんだよ。細かい理屈はわかんないけど脳波とか読み取るんだって」

「スゲー……」

ひたすら感心する終時に梨依菜はくすりと笑い、

「コレからもっと楽しいよ！　それじゃログインするからゴーグル付けて」

「ああ」

「ゼロエターナル・オンライン開始！」

かちりとクリックする梨依菜。二人の視界が真っ暗になった。

「……………ん」

終時が眼を開けるとそこは、
「うお!？」

物語の世界が広がっていた。中世のヨーロッパの古風な町並み。そこを闊歩する様々な人達。剣を携えた者や魔法使いの格好をした者、更に獣人や亜人までと本当に賑やかだ。

「……スゲー……本物みたいだな」

ゲームとは思えない。本当に異世界に来たようだ。

自分自身も変わった格好をしている。物語に出て来る勇者のよう格好だ。

「身体も自由に動かせるな……」

両手両足小指まで自分のモノのように動かせる。

「ね! 凄いでしょ!」

「ああ……梨依……」

梨依菜の声がして振り返る。そこで絶句。

髪型と服装以外は梨依菜そのもの。終時が驚いたのはソコでは無く、梨依菜が立っていた事だ。二本の足でしっかりと。地面を踏み締めるように。

そんな奇跡みたいな光景に絶句する。

「……」

「お兄ちゃん？」

「……あ」

梨依菜の声で正気に戻る。

そう言えばと気付く。

(此処はゲームだったな……)

現実でも、同じ光景を見たいなと終時は思った。有り得ない奇跡だとしても……

「変なお兄ちゃん……ステータス確認してみて? 開くにはメニュー

ー確認って思えばいいよ」

「ああ……こうか？」

シュージがそう念じると目の前に画面が現れる。

「スゲー映画みてー」

「項目にステータスがあるよねそれを押してみて」

「あ、ああ……」

プレイヤー シュージ

職業 《剣士》

LEVEL 1

LIFE 200

SP 50

AP 0

ステータスと書かれた所を押すと上記の画面が現れた。

「LIFEが無くなるとゲームオーバーだよ。強制的にタウンに戻されて、手に入れたアイテムは全部無くなっちゃうんだよ。気をつけてね。SPはスキルを使うのに要るから」

「APってのは？」

アクティブポイント

「APスキルの強化に要るの。スキルについては戦闘で教えるよ。次は装備画面を見てみて？」

「ああ。こうか？」

シュージ 《剣士》

武器 ブロンズソード

盾 無し

頭 革帽子

体 ブロンズアーマ

装飾品1 マント

装飾品2 無し

「しょばいな……」

「そりゃそうだよ。仕方ないなコレ上げるよ」

《リーナから「リーナのペンダント」を受け取りました。》

「これは？」

「わたしがカスタマイズで作ったの。お兄ちゃんにプレゼント」

《リーナのペンダント》はパラメータを全アップ。状態異常無効。と言った優れた効果があった。

「いいのか？」

「わたし一杯持つてるもん。一個くらいあげるよ」

「ありがとう。なんか照れ臭いな……」

「あ。一応わたしのパラメータ見る？」

「ん……ああ」

プレイヤー

リーナ

職業

《双剣士》

LEVEL

50

LIFE

3249

SP

520

AP

1542

「つよ……!?」

「装備も見る？」

リーナ

《双剣士》

右武器

ペイルソード

左武器

マサムネソード

頭

疾風のバンダナ

体

セルトの服

装飾品

月の紋章

装飾品

血と闇の印

「お前……今日ログインしたんじゃ？」

「うっん。実はわたしテストプレイヤーだもん」

「……？ 何ソレ？」

「サービス配信前に不具合が無いか有志を募ってプレイが出来るの。実はわたしも参加しててキャラ引き継ぎしてるからね」

「……きたね」

「まあまあ。ちなみにここは中級者サーバー《エル・ティミア》だけど弱いモンスターが出るエリアもあるからね。早速ダンジョンエリアに行こ？」

「買い物とかは？」

「わたし回復アイテムも蘇生アイテム一杯持つてるから大丈夫だよ」

「……成る程」

「それじゃ南ゲートに行くよ」

「そう言つてリーナは走り出す。その後ろ姿を追い掛けながら、

「たまにはゲームもいいかな」

そう呟くのだった。

「……と」

「……！！」

通行人に肩がぶつかる。黒髪の鋭い目つきをして、紅いマントが特徴的だった。

「わ、悪い」

反射的に謝るシュージ。それに対して、男は短く表情を変えずに、
「……………いや」

そう答えた。冷え切ったようなナイフのように鋭い声だ。

「……………お兄ちゃん」

遠くからリーナの声が聞こえてくる。

「……………ツレが待っているようだな」

「あ、ああ。悪かった」

男に頭を下げ、シュージは逃げるようにリーナを追い掛けた。

（なんだ……………今の奴）

見た瞬間から、悪寒が止まらない。

(二度逢いたくないな……)

シュージは心の底からそう思った。アレとは確実相入れない存在……そんな確信めいた予感がシュージの頭を過ぎ_よった。

「…………ふん」

シュージを見送り、男は目を細めた。

「あの男……まさか……」

実験動物を見つけた科学者のような好奇心の笑みをシュージの去った方へ向けた。

「試してみる価値がありそうだ……」

そう言っ_て愉快そうに邪悪に満ちた笑みを浮かべた。

RealSide1「ハッカー」(前書き)

現実サイドで語られる物語です。Accessと同時進行していきます。

Real Side 1「ハッカー」

Real Side 1「ハッカー」

この世界はどこかイカレてる。俺はいつでもそう思っている。コンピューターに頼り切りの世界。それはつまりコンピューターに支配された世界と言い代えるべきだ。そんな世界を商売にしている俺も……またイカレているんだろう。

情報に溢れた社会。情報は武器に。金に。命に。

そんなくだらないモノの為に俺は命を賭けている。富を得る為？ 権力を得る為？ 裏社会を牛耳る為？ 違う。

俺はただ知りたいだけだ。

こんなくだらない世界が、こんなくだらない俺が、存在する価値があるのかを。

「な、なにい！」

俺は驚いた。いや今年一番の驚きだ。

「ま、マジか！？ あのゲームに興味の無い無関心野郎、秋島が『ゼロエターナル・オンライン』をプレイしてるだとお！？」

「そんなに驚くコトか？」

クラスメイトの秋島終時は呆れ顔で呟いた。この時勢で珍しくパソコンが扱えないアナログな人間だ。この世界で会ったマトモな人間だ。でもこの世界ではマトモこそイカレている訳だがな。

故に驚いた。そんな男がオンラインゲームを、しかもあの「ゼロエターナル・オンライン」をプレイしているとは。天地がひっくり

返った程度では驚かんがこれには驚いた。どういつ風の吹き回しだ？
「だってよ……お前が……！？ 似合わねーって。だからアカウン
ト寄越せ」

「誰がやるか。俺も珍しく面白いと思ったからな」

「隕石が降って来そうな発言だな……妹ちゃんの影響？」

「ま……そうかもな」

朝飯がてら買った菓子パンをまずそうにかじりながら、秋島はそ
う肯定した。

「しかし……『ゼロエターナル・オンライン』って妙な噂があんだ
よな」

一般的にスレッドや掲示板からの噂だ。使えないのだろうから知
らないのも無理はない。

「噂……？」

「ああ……ゲーム内で死亡するとプレイヤーはゲームに閉じ込め
られてしまうとか。

黒いモンスターに襲われとログアウトが出来なくなるとか。

そしてサービス開始から一年……誰もこのゲームをクリアした
者は居ないとかな」

俺は恐そうな雰囲気を出しながらそう言った。

ま、秋島の事だから信じねーだろうな。

「そりゃ怖い」

予想通りのリアクション。

「あ。信じてねーな？」

「都市伝説の類だろ？」

「いや……ゲーム内にもログアウト出来なくなった、って言い続け
るプレイヤーも居るって」

と俺は嘘を吐く。

実際に、このゲームをやっていて行方不明になった者がいる。ク
リエイト・ライフ社は隠蔽しているが、俺独自に調べた所100人
はくだらない。

噂が事実だと知っている。クリエイト・ライフ社は、もつと黒々したモノを抱えている。

「……………」

何か思い当たる事があるのか、少し秋島の表情が変わる。

「そういう演技じゃないのか？」

秋島は本心では無いだろうがそんな事を言った。

「おお……よくお前がロールなんて知ってたな」

「梨依菜に教えて貰った」

「さっすが……」

と言いつつ、ある疑問が沸いて来る。

「あれ……そっぴや学校の時妹ちゃんどうしてんの？ 一人で大丈夫な訳か？」

生まれつきの下半身不随。学校おろか日常生活すら困難な筈だ。

秋島兄妹。悪趣味かも知れないが仕事上、彼等の経歴を調べた事があるが……とてもでは無いが正気を保ってられるかが不明なくらいの地獄を経験していた。

思わず、引いてしまっぐらいには。

だからこそ秋島は『お人よし』なのかもしれない。

「メイドさん雇ってるからな」

あっさりと答を言う秋島。メイドさんと来たか……クソツ羨ましい！

「うへー金持ちーっかメイドさん！ 美少女メイドさんなのか！？」

「午前中だから安く済むんだよ。つか妙な妄想抱くなよ」

メイドさんは男の浪漫だろうに！ エプロンドレスを身に纏う姿は正に神！ あれこそ人の生み出した文化の極みだ！

まあ仕事柄メイドさん雇えないんだけどな。

「はあ……明日から夏休みだと言うのに……金が無い貧乏人はオンラインゲームを遊ぶと言う文化人の享受出来ないのかあ！」

と再び嘘を吐く。自慢にはなるが人生を三回くらいならやり直せ

る財産を俺は持っている。

「大袈裟だな……」

「あれー？ シュージ君も『ゼロエタ』知ってるの？」

そう言って会話に入って来たのは同じくクラスメイトの女子、宮島亜緒やしまあおだった。気さくで明るい人物で、誰にでも笑顔で接する。

二人の会話を聞き流しながら俺は別の事を考える。

宮島亜緒。経歴はとても普通だ。両親と弟との4人暮らし。特別な事件や経過も無く、この高校に入学。

なんと言つか。普通だ。普通なだけ。

そう彼女は普通過ぎる程普通な経歴なのだ。なんの取り留めない不自然な普通な経歴と経過。

まるで誰かに用意された経歴をそのまま使用したかのように。そこまで考えチャイムが鳴る。

「あゝ。チャイム鳴っちゃったね。《蒼樹》ってキャラでログインしてるからゲームで会ったらヨロシク！」

「ああ。オレは《シュージ》って名前。キャラもそのままだからすぐに解るよ」

「うんっ。分かった！」

会話が終わり、彼女は自分の席に戻っていった。

（考え過ぎか……）

クラスメイトを疑うのは余り感心出来る事じゃない。

でも、俺の嫌な予感によく当たる。

「はい。席につけ」

担任の話を上の空で聞きながら、俺はそんな事を考えていた。

「そんじゃ……来学期な」

「おう」

そう言っただ秋島は帰路に着こうとしたが、

「ああ……そうだ秋島」

俺はふと思い出したように振り返り秋島を引き止めた。

「お前、この世界ってイカレてると思わねえ？」

「は……？」

唐突に意味の解らない事を言い出す俺に、秋島は首を傾げる。そりゃそうだ。でも。それでも俺は聞いておきたい。秋島はこの世界をどう見ているのか。

「いや。一人に一台パソコンで、仕事も勉強も遊びも買い物も機械任せ。な？ よく考えりゃイカレてる」

「……………」

「便利といやあそうだが、機械頼り……それは逆に言えば機械に支配されている……違うか？」

そう俺は常々思っている事を口にする。

この有り得ない程のお人よしはなんと答えるのか？

「……さあ。オレはそんな事考えたコト無いけど……」

「けど？」

「支配って言うより共存って感じだと思っけどな。お互いどっちも欠けちゃ駄目だろ？」

予想を超える秋島の答え。だからこそ秋島だ。

「……………」

つまり秋島は機械は人がいなければ意味が無いし、同時人も機械が無ければ生きてはいけない。

秋島はそう言いたいらしい。

「……成る程。秋島らしい意見だな」

俺は思わず笑みを浮かべてしまう。秋島は怪訝な表情を浮かべている。ま。当然か。

「どういう意味だよ？」

「秋島は秋島ってコトだよ。お前は自分が変わっていると認識しねーとな」

「……人を変人扱いだよ」

「ちげーよ。じゃな」

そう言いながら、俺は背を向け歩き出す。

「あ、ああ」

秋島もまた腑に落ちない感じで歩き出した。

「……ゼロエターナル・オンラインには何かがある。気をつける。
秋島」

思わず。《ハッカー》としてはあるまじき情報を秋島に教えてしまった。
「……！」

秋島が振り返る前に、俺は路上裏に消えた。

A c c e s s 3 「小さな綻び」

A c c e s s 3 「小さな綻び」

「だから、雑魚相手に技使スキルわない！」

「……」

「弱いのに出ない！」

「……前月撤回しよつかな……」

「強い装備品をしてるからって調子に乗らない」
「とんでもなくリーナはゲーム内では口うるさかった。事ある毎に細かい指示を与えて下さる。ゲームなんだから……適当でいいんじゃない……」

「だからっ。そう言う考えが駄目なんだよっ」

「ちなみにシュージとリーナが居るのは《クリフオーノ洞窟》と言う中級者向けのダンジョンだ。とは言っても、中級者になったばかりのプレイヤー向けなので、そこまで難易度は高くない。薄暗い雰囲気、団気のダンジョンで、シュージは更に気が滅入った。」

「……はあ」

「思わず溜息を吐くシュージ。ゲームの事になると梨依菜は凄く厳しい。」

「ん……？」

「リーナが視界に捉えたのは巨大な熊のモンスターだ。《エルベア》と呼ばれるモンスターだ。特殊能力は持たないが攻撃力は高くプレイヤーを見つけたらすぐに襲い掛かってくる。」

「調度いい……見せてあげるよ。戦い方を」

「え……ちよつと俺は？」

「お兄ちゃんはゆつくり見物しててよ！」

「リーナはモンスターに向かって駆け出す。」

「たぁ！」

モンスターが気付く前にリーナの双剣が牙を向く。
舞のようにモンスターを切り裂いていく。次々とダメージ表記される。

グオアア！！

モンスターが気付き反撃する前に一步下がる。

「火炎の札！」

モンスターの身体が火に包まれる。下位の魔法アイテムだが動きを止めるには十分。

怯んだ隙に再び容赦の無い連撃。

グオアアアアアア！！

断末魔の悲鳴を上げ倒れるモンスター。二人はパーティを組んでいる為二人共経験値が入る。

「……こんな感じかな」

事もなさ気に息を吐くリーナ。そんなリーナにシュージはみとれていた。

「……す」

「す？」

「スゲー……！」

鮮やか過ぎる。というかカッコイイ！

「……そ、そうかな？」

照れ臭そうに微笑むリーナ。しかし直ぐさま、

「ま……まああれくらい出来ないとすぐにゲームオーバーになるんだから……ちゃんと覚えてよ？」

「あ、ああ。習っていけばお前みたいに動けるようになるのか？」

「まあ……本人の努力次第かな」

「成る程な……」

シュージは自分でも分からない程興奮していた。強さはやはり憧れになるものだ。

「じゃあ……ビシバシ行くから覚悟してね？」

「な、なるべくソフトに……」

「ハードに行くよ？」

「勘弁してくれ……」

「ふふ……」

くすつと笑い、再びシュージの手を取る。

「それじゃ行こう？」

「ああ」

再び並んで歩く二人。

「しっかりアイテムは使う事。攻撃が当たったからって調子に乗らない事。スキルは強敵だけに状況に応じて使う事」

「学校の勉強より難しいな……」

「……ん。そろそろ外だね」

「みたいだな」

光りが刺し込んでくるのを感じとれた。

「……」

外に出ると暫く目が眩む。

光りに馴れ目を開けると、

「うお……」

絶景が広がっていた。雄大な深緑の森に、所々広がる湖。現実世界では見たの無い美しい光景だった。

「ね！ 綺麗でしょ！」

「ああ。ホントにゲームかコレ……？ 信じられない……」

「……」

そうシュージが言うとしリーナは俯いた。

「？ どうしたリーナ？」

「ねえ……無理してない？」

恐る恐ると言った様子で聞いてくるリーナ。

「無理って？」

「わたしに付き合っ嫌々プレイしてるのかな……？」

「……」

「だったら無理しなくても……」

「綺麗だなあ。ピクニックでもしたい気分だ」
虚を付かれたようにキョトンとするリーナ。

「……………え？」

「最初は確かに。でも今違うよ。こんな綺麗な景色があつて、頑張ればあんなに凄い戦いが出来る……俺、このゲームやってよかったよ」

あんなに楽しそうな梨依菜を見るのは初めてだった。

そうシュージは心の底からそう言った。

リーナは俯いた顔を上げ、

「うん！」

そう言つて笑つた。その笑顔を見てシュージも笑つた。

「ふう……………」

「レベルも結構上がったね」

「お前には遠く及ばないけどな……………」

タウンに戻つて、のんびり話す二人。行き交うプレイヤー達を見ながらシュージは、

「そっいや……………キャラの向こう側では俺達みたいに人が操作してるんだよね？」

「ん？ まあそうだね」

「想像すると酔うな……………」

「……………まあ最初の内はそんなモンだよ」

「でも……………細部まで造り込まれてるよなあ……………なんか……………その場で生きてるみたいだ」

何と無く、シュージはそう感じた。そこで生きているかの生活感がゲームである事を感じさせない。そんな奇妙な雰囲気ココには

あつた。

「詩的な事言うんだね。ゲームと現実をリアルごっちゃにしちゃ駄目だよ……ここはゲームなんだから……」

感情を込めず、冷めた口調でそう言うリーナ。

それはまるで自分に言いかせるような口調……シュージには聞こえた。

「おい！」

「……！」

急に呼び掛けられ、慌てて振り返る。そこには、中年の《剣士》が必死な表情を浮かべていた。

「た、助けてくれ！」

「……え……な」

言われた事を理解出来ずに、困惑するシュージ。

「お兄ちゃん演技だよ。ロール」

「ロール？」

「演技のコト。そうキャラで設定なの」

「ち、違う！」

《剣士》の男はリーナの言葉を叫ぶように否定する。

「ロールなんかじゃねえ！ 俺……ログアウトできないんだよ！ 変な黒いモンスターに襲われて！」

「はいはい……行くよ？ お兄ちゃん」

「あ、ああ……」

リーナに手を引かれ歩き出す。

「ま、待て！ 嘘じゃない！ 本当だ！ 信じてくれえ！」

男の必死な声を背中に聞きながら、その場から去っていく。

「ち、畜生……！ どいつもこいつも！」

悪態を吐く男。その背中に、
ドスッ。

「……え？」

刃が生えた。背後に居た朱いマントの男の朱い剣だった

「……………」

「な……げぶ、ご！？」

「やはり素質があると考えるべきだな」

その事が何でも無いコトのように語る朱マントの男。その興味は
他に向けられていた。

「ひい！ い、イテエ！？ な、なんで！？ ぎい……ああ……俺の

俺の俺の……ああああ！！」

存在しない筈の激痛が男を襲っていた。

「うるさい」

一瞬男に目を向ける。その目は自分の肩に止まった汚らしい蠅を
見るような目だった。

「……ここに存在する価値は貴様には無い……消えろ」

そのまま払うように剣を振るう。

「……………！」

今度は男は音も無くこの世界から『消滅』した。

「《シュージ》と《リーナ》か……くくく」

不吉に笑うその男もまたその場から消えた。

「……………放って置いて良かったのか？」

「あーゆうのは放って置くのが一番だよ……もしかして本気にした

？」

「……………いや」

あの迫力は嘘をついているとは思えなかった。でも信じるには突

飛過ぎた。

「……じゃあそろそろログアウトする？」

「……え？ もうそんな時間だっけ？」

「ゲームしていると、時間が過ぎるのも早いんだよ？ お兄ちゃん疲れたでしょ？」

「……確かに……」

「それじゃ……ログアウト！」

《リーナがログアウトしました》

その言葉が現れた後、リーナの姿が消えた。

「……不思議なゲームだな」

リーナが嵌まるのも解る気がする。

（さて……俺も現実に戻るか……）

永遠にココに居てもいい

「……！」

何だ……今の声……？

周りを見渡しても近くに人は居ない。

「……気のせいかな？」

疲れてるのだろうか……。幻聴まで聞こえてくるなんて。

「……オレもログアウトするか」

画面を操作し、ログアウトを選んだ。再び画面が真っ黒になる。

その場から消えるシュージを見詰めるモノが居た事に誰も気付かなかった。

A c c e s s 4 「日常」

A c c e s s 4 「日常」

「ま、マジか！？ あのゲームに興味の無い無関心野郎、秋島が『ゼロエターナル・オンライン』をプレイしてるだとお！？」

「そんなに驚くコトか？」

翌日、高校に登校した終時は昨日の事をクラスメイトに話したら、そんな風に驚かれた。

今日は終業式。教室は夏休みの話題でかなり賑わっている。

「だってよ……お前が……！？ 似合わねーって。だからアカウント寄越せ」

「誰がやるか。俺も珍しく面白いと思ったからな」

「隕石が降って来そうな発言だな……妹ちゃんの影響？」

「ま……そうかもな」

朝飯がてら買った菓子パンをまずそうにかじりながら、終時はそう肯定した。

「しかし……『ゼロエターナル・オンライン』って妙な噂があんだよな」

「噂……？」

「ああ……ゲーム内で死亡するとプレイヤーはゲームに閉じ込められてしまうとか。

黒いモンスターに襲われとログアウトが出来なくなるとか。

そしてサービス開始から一年……誰もこのゲームをクリアした者は居ないとかな」

本人は恐そうな雰囲気を出しているつもりなのだろうが終時には見馴れた間抜け面にしか見えない為、恐怖は微塵も感じなかった。

「そりゃ怖い」

「あ。信じてねーな？」

「都市伝説の類だろ？」

「いや……ゲーム内にもログアウト出来なくなった、って言い続けるプレイヤーも居るって」

「……………」

昨日の事が頭を過ぎる。

『助けてくれ!!』

『ゲームから出れなくなっただんだ!!』

『嘘じゃない!!』

『変なモンスターに襲われて』

そう繰り返すプレイヤー。演技共思えない迫力に、まるでそこに居るかのような……

(まさか……な)

「そういう演技じゃないのか？」

「おお……よくお前がロールなんて知ってたな」

「梨依菜に教えて貰った」

「さっすが……」

そんな訳無いと思いながら、しかし終時は嫌な予感を拭い切れなかった。

「あれ……そーいや学校の時妹ちゃんどうしてんの？ 一人で大丈夫な訳か？」

「メイドさん雇ってるからな」

「うへー金持ちーつかメイドさん！ 美少女メイドさんなのか！？」

「午前中だけだから安く済むんだよ。つか妙な妄想抱くなよ」

確かに秋島家にはメイドが居る。だが秋島家は別に大金持ちと言う訳では無い。単に両親がいないからだ。学校の間だけとは言え、病気を抱えた妹を放って訳にはいかない。その為雇っている訳だが

……よく勘違いされる。

「はあ……明日から夏休みだと言うのに……金が無い貧乏人はオンラインゲームを遊ぶと言う文化人の享受出来ないのかあ！」

「大袈裟だな……」

「あれー？ シュージ君も『ゼロエタ』知ってるの？」

そう言っただけで会話に入ってきたのは同じくクラスメイトの女子、宮島亜緒やしまあおだった。クラスの委員長で陸上部のエースだったりする。気さくで明るい人物で、誰にでも笑顔で接する。

「宮島もゲームするのか？」

「なにになに？ 意外？」

意外と言えば意外。彼女は陸上部のエースでどちらかと言うと体育会系。ゲームなんて無縁だと終時は思っていた。

そう思った事を口にする、

「それは偏見だぞ？ シュージ君」

ちつつちと指を振る宮島。

「アタシは陸上部だけど、ソフトボールの方が好きなの？」

「はあ？ じゃあ何で陸上部に？」

「得意だからだよ。シュージ君も運動得意だけど部活入ってないよね？」

「……成る程、つまり」

「そうそう好きと得意は違っただけだ！」

そう言われたら納得しざるを負えない。そんなやり取りをしている内にチャイムが鳴る。

「あゝ。チャイム鳴っちゃったね。《蒼樹》ってキャラでログインしてるからゲームで会ったらヨロシク！」

「ああ。オレは《シュージ》って名前。キャラもそのままだからすぐに解るよ」

「うん。分かった！」

そう元気に言うと、彼女は自分の席に戻っていった。

「はい。席につけ」

担任の話しを上の方で聞きながら、
(ゼロエターナル……永遠の虚無か……一体どんな意味なんだろう
な)

そんな事を考えていた。

「そんなじゃ……来学期な」

「おう」

そう言つて終時は帰路に着こうとしたが、

「ああ……そうだ秋島」

ふと思ひ出したように振り返り終時を引き止めた。

「お前、この世界つてイカレてると思わねえ？」

「は……？」

唐突に意味の解らない事を言い出す友人に、終時は首を傾げる。

「いや。一人に一台パソコンで、仕事も勉強も遊びも買い物も機械
任せ。な？ よく考えりゃイカレてる」

「……………」

「便利といやあそうだが、機械頼り……それは逆に言えば機械に支
配されている……違うか？」

「……さあな。オレはそんな事考えたコト無いけど……………」

「けど？」

「支配つて言うより共存つて感じだと思ひけどな。お互いどっちも
欠けちゃ駄目だろ？」

「……………」

機械は人がいなければ意味が無いし、同時人も機械が無ければ生
きてはいけない。

「……成る程。秋島らしい意見だな」

再び興味深そうに笑みを浮かべる友人。

一体どういう意図の質問だったのだろうか？

「どういう意味だよ？」

「秋島は秋島ってコトだよ。お前は自分が変わっていると認識しねーとな」

「……人を変人扱いかよ」

「ちげーよ。じゃな」

そう言いながら、友人は背を向け歩き出す。

「あ、ああ」

終時もうまた腑に落ちない想いで歩き出した。

「……ゼロエターナル・オンラインには何かがある。気をつける。
秋島」

「……………！」

そんな警告が背中から聞こえ慌てて振り返るが、

「……………え？」

そこには友人の姿は無く、他の帰宅している生徒達だけだった。

「あ。お帰りなさい旦那様」

帰宅後。秋島家の前に居たのは、箒を持った黒いゴシック調のエプロンドレスを纏った可愛い女性だった。終時よりも年上の筈だが、外見は梨依菜よりも小柄で、華奢な見かけだが終時よりも力が強く、しつかりと仕事をこなし、氣遣いも忘れない。

「ただいま。命里^{めいり}さん。旦那様は止めてくれって言ってるだろ？」

終時にとって彼女は使用人と言うより年上の姉のように接している。だから旦那様等と言われるとむず痒いモノだ。

「旦那様は旦那様ですから」

そう言って微笑む命里。人を安心させる慈母のような笑みだった。
「梨依菜は？」

「お嬢さまですか？ 旦那さまのお帰りを心待ちにしておられるよ

うでしたが……何かあったのですか？」

「梨依菜とゲームをして遊んでやるって約束してるんだ」

「まあ……旦那さまが珍しいですね」

「何となくね……ともあれお疲れ様。9月からまた頼むよ」

「本当に宜しいのですか。旦那さまも遊びに行く予定等は……？」

心苦しそうにそう聞く命里に終時は笑って応える。

「バイトは夏休み期間は休むから問題ないよ。命里さんだって他に仕事あるだろ？」

「旦那さまがそうおっしゃるなら……でも無理はいけませんよ？」

お身体が辛い時はいつでもご連絡をして下さいまし」

「ああ。心配してくれてありがとうございます」

「では、失礼します」

完璧なお辞儀をして去っていく命里。

「……さて」

終時は家の門を潜り、パスワードを入力し玄関の鍵を開けた。ちなみにこの作業を覚えるのに終時は一週間かった。

「ただいま」

靴を脱ぎ、家に上がる。自室で私服に着替え、梨依菜の部屋の前立つ。

（ノックしないと怒るからな……）

軽く叩く。2、3回叩いた所で、

「お帰り〜入っていいよ〜」

「ただいま。入るぞ」

そう言って入った梨依菜の部屋は少し片付いていた。

「命里さんか？」

終時がそう言うのと梨依菜は不機嫌そうに、

「そつだよ。勝手に整理とかされちゃ堪んないって言うのに、あの女と来たら」

そう言った。梨依菜はメイドの命里の事があまり好きでは無く、口を開けば悪態ばかりだ。

「世話して貰ってる人にそんな言い方は無いだろ？」

「こっちはお金払ってるの。いい？ あの笑顔もわたしの世話もお金の為のサービスなの。それがメイドなんだから」

相変わらずゲーム以外に冷めた意見だ。

「と言つても世話になつてるのは事実だろ」

「むう……なんでそんなにわたしよりあの女肩を持つの？」

「いや……別にそんなつもりじゃ」

「おっぱいが大きいから！？」

「ぶっ！！？」

何てコト言いやがりますかこの妹は！？

確かに命里さんの胸は体格の割りには……

「つて違う違う！ そんな訳無いだろ！？」

「男の人は皆おっぱい星人なんだよ！」

「全国の男の人に謝れ！」

「わたしもおっぱいあるモン！」

梨依菜はそう言うたとバツと服を開いた。終時に見せ付ける。

「……………」

別に何もこれと言った反応をしない終時。

「……………あれ？」

ノーリアクションの終時を見て、梨依菜は首を傾げる。

「ここは普通慌てふためくべきなんじゃないの？」

「いや……妹のを見てもな……」

特別にやらしいと言った感情は沸かない。むしろ妹に欲情する方がマズイのでは？

「それに、着替えとか、風呂とか、トイレの世話とかしてるの誰だと思ってるんだ？」

「う……盲点だったよ。はあ……ギャルゲーだとフラグが立つのにギャルゲー？ フラグ？ 何だソレ？

いそいそと服を戻す梨依菜はそんな終時にとって意味の分からない呪文を呟く。

「シチュ自体はそのものなのに、どうしてイベント発生しないかな。早いヤツではこの時点で……」

「おい……なんかそれ以上はヤバイ気がするぞ」

直感的に嫌な予感がした。

「ちよつとシヨックだよ」

「お前な………」

「まあ。仕方ないか。お兄ちゃんだし」

「……………」

どう意味だ？ とは何故か恐くて聞けなかった。

「さて……ゼロエタやつと忘れるよ！ 明日から夏休みなんだしずーと付き合つて貰うよ！」

「毎日は勘弁してくれ………」

『ゼロエターナル・オンラインには何かある』

そんな友人の言葉が頭を過ぎる。まさか……噂は、本当に？

「どうしたの？」

「……いや」

（……考え過ぎだろ。ゲームは楽しまないとな）

「早くやろうぜ」

「お。珍しく積極的、いいよ。またしごいてあげるよ」

「……それは勘弁だな」

そう……噂は噂だ。終時はそう自分に言い聞かせた。

『気をつける』

友人のあの声が嫌に頭に残った。

A c c e s s 5 「非日常・反転・過ぎ去る平穩」

A c c e s s 5 「非日常・反転・過ぎ去る平穩」

「それで今日は何処に行くんだ？」

「そうだね……昨日行った『クリフォードの洞窟』の最深部に行こうかな。レベル上げには最適なんだよ」

「敵……強いのか？」

「まあまあかな。わたしが居るから問題は無いよ」

「……オレは問題アリだよ」

シュージとリーナはそんな会話を繰り返しながらタウンを歩く。
昨日より更に多くのPCが集まっていた。

「今日から休みだけあって人も多いな……暇なのか？」

「何言ってるの？ ゲームしてるんだから暇じゃないよ」

「……………」

「ああ。そうだ。お兄ちゃんPKに注意してね」

「PK？」

「Play Killerの略で、他のPCを襲う行為の事だよ」

「……そんな事する奴居るのかよ。陰険な奴等だな」

「まあロールと同じで楽しみ方の一つだからね。わたしも全否定する訳じゃないけど、お兄ちゃんみたいな明らかに初心者オーラを出してる人は狙われやすいから……w」

「悪かったな」

「わたしだっていつだって守ってあげれないから」

「……普通立場逆だよなあ」

「だったら……強くなってわたしを守ってくれろ？」

冗談めかしてそう微笑むリーナ。シュージも苦笑いを浮かべ、
「ああ。リーナの事守ってやるよ」

「約束だよ？」

「ああ。任せろ」

そう言っで見つめ合う二人。そして、

「……ぷ、くく」

「……ぷはは」

「ははははははは！」

「あははは！」

お互いに堪えきれないなる笑い合う二人。周りのPCは痛い人を見るように去っていく。

「お兄ちゃん似合わない」

「そりゃこっちの台詞だ」

そして再び笑い合う二人。楽しそうに、心の底から楽しそうに。

思えば、こんな風に笑い合えたのはこれが最後だったのかも知れない。

「つ、疲れた……」

「リアルで疲れてる訳じゃないでしょ？」

「いや……精神的に……」

シュージはへとへとだが、リーナは元気一杯だった。

「あれ……？」

もうすぐタウンに戻ると言った所で、リーナは立ち止まり首を傾げた。

「どうしたリーナ？」

「こんな扉あつたかな？」

リーナが指を指したのは、一つの扉。複雑な紋様と、神々しい女性の姿が描かれている。痛々しい茨に捕われている姿だ。

「この世界を創ったと言われる女神様だよ」

「……痛そうな絵だな」

「自分への戒めだそうだよ。世界を創った自らの力を律する為に茨で自分を締め付けているんだって」

「……理不尽な話だな」

「ん？ どうして」

「女神様は何も悪いコトしてないだろ？　なんでわざわざ痛い目に遭わなくちゃいけないんだよ？」

「……んー。強い力は危険だからね。もしも暴走したら危ないですよ？」

「そうだけど……」

理屈は解るが、あまり納得は出来ない。

「すっかりゲームに嵌まり込んでるね？」

「む……そっぴゃー緒ゲームである事忘れてた……それじゃ帰ろうぜ」

「いやいや！　行くべきだよ！　レアモノあるかも！」

「……はぁ……仕方ないな……」

何気なく、シュージが扉に触れる。すると、

「……！」

扉が蒼い光りに包まれ、開いていく。……まるで二人を招き寄せるように。

「凝った演出だねっ。さ、行こう？」

「あ、ああ」

嫌な予感を振り切り、リーナの後を追った。

「……何だ、ココ？」

ぼつりとシュージはそう漏らした。

薄暗い空間に広がっていたのは不気味な祭壇だった。

「……………」

「不気味な場所だね……………」

「……………」

「どうしたのさっきから黙って?」

「……………いや何か……………嫌な予感が」

画面にノイズが走る。

「……………!?!」

「お兄ちゃん! 下がって!」

先に反応したのはリーナだった。リーナの叫びに反応して慌てて下がるシュージ。

ついさっきまでシュージが居た場所には。

「……………! 何だ……………コイツ」

黒い人間のシルエット……………と呼ばばいいのか。巨大な人影に朱い紋様が走っている。そんな意味不明なモノが唐突に、いや始めからそこに存在していたかのような現れた。

「……………モンスター……………?」

いや、違う。そんなモノじゃない!

「何だ……………コイツ?」

「どんなモンスターだろうとわたしの敵じゃないよ!」

そう言って駆け出すリーナ。ほぼ一瞬で異形の懐に入る。

「リーナ!? よせ!」

シュージは直感的に叫ぶ。あれは対峙してはいけないモノだ。だがもう遅い。

出会った時点で、いや、遅いといえはこのエリアに入った時点で、シュージ達の運命は決っていた。

「はああ!?!」

黒い異形の物体に双剣で斬り掛かる。

「ドラゴンブレイズ!?!」

両の剣が蒼い竜の闘気を纏う。

「メイルシュートローム!」

渦状に斬り剣撃が舞う。竜を纏った強力なスキル。並のモンスターなら一撃のスキル。だが、

「え……？」

%×ダメージ。##%ダメージ。

「効いて……無い？」

ダメージ表記は文字化けしていて分からなかった。

「くっ」

「リーナ！ もういい！ 逃げよう！」

シュージの制止を無視しなお斬りかかる。必死の表情を浮かべリーナは叫ぶ。

「……うああああー！」

「くっ！ リーナ！」

リーナを止めようとシュージも駆け出す。

しかしその行動は、自体をさらに最悪な状況へ変えていく。

「ああああああああアaあああ~~~~~~~~~~~~」

~~~~~！！！！」

黒い異形からそんな音が発せられる。絶望をそのまま音にしたようなソレは悍ましいと言うにも生温い。そんな音が二人の耳朶を打つ。

「うああああ！」

「くっ……っ」

耳を抑えうずくまる二人。

更に異形は姿を変える。異形から幾重もの触手が生える。黒い触手は、悍ましく蠢く。

「……！」

その触手全てがシュージに殺到する。

自分に迫る触手にシュージはただ呆然とソレを見るしか出来なかった。

（あ……駄目か……）

スローモーションで迫る『死』 思わず強く目を閉じる。

(畜生……)

しかし、『死』はいつまでも訪れない。  
恐る恐る目を開く。

え？

否。既に「死」は訪れていた。

シュージの目に映った光景は、

!!

幾重の触手に軀の至る所を貫かれたリーナの姿だった。

「なん……で？」

あまりの事態に、シュージの頭が追い付かない。

「……そこから」

リーナの虚な眼差しはもう既に焦点があっていなかった。

「え？」

「……ま……もる……って」

!!

触手に磔けにされた状態で持ち上げられるリーナ。

「やめろ」

喉を搾りあげたような枯れた声しかあがらない。

異形が黒く発光する。

「やめろおおおおお！！」

異形から発せられた黒い光がリーナを飲み込んだ。

「梨依菜ああああああああああああああああああああ！」

!!!

声も無く、リーナは、秋島梨依菜は『消滅』した。

「あ……ああ……うあああああああああ！！」

叫ぶ事しかシュージには出来なかった。ぎょろりと異形がこちらを向く。

何も反応出来ない。呆然とソレを受け入れる事しか出来なかった。視界が黒く染まっていく。シュージがはつきり覚えていたのはそこまでだった。

『警告はした筈だ』

……誰……だ。その声は聞き覚えはある。

『間一髪……間に合わなかったか……』

誰だっただろうか……？

『……チツ。時間が無い。もし、生き残れたら』

何を言っているんだ？ オレは、ただ……

『……を探せ、 % したら% × ！！』

……なんだよ？ 聞こえない。

声が唐突に消える。それと同時にシュージの意識も沈んでいった。



## Access 6「ミイナとルクシオン」平穏な時」

Access 6「ミイナとルクシオン」平穏な時」

《コモン・ルーバタウン》。閑静な村を思わせる長閑な村。初心者向けのサーバーでゲームを初めたての初心者が集まる。

中級者向けの《エル・ティミア》程では無いが、十分に人で溢れていた。

「ええー！ 回復薬売切れなんですか!？」

タウン内の露店で叫ぶ一人の女剣士。名前はミイナ。大きなリボンが特徴的で、小柄で優しそうな外見だ。《治術師》を思わせるPCだが、彼女は《剣士》。よく言えば癒し系悪く言えば使えそうに無い女の子だった。

「いやーごめんねミイナちゃん。さっき買い込んでいった人が居てね」

ミイナの相手をしているのは露店の店主。《ギルドショップ》とって一般のプレイヤーでもショップを開く事が出来る。通常のショップと比べ、安価で質が良いモノが多く珍しいモノも時として並ぶ。

ミイナとも顔見知りのようで店主は困った顔を浮かべる。

「……うう」

「NPCのショップで買うしか無いかな」

NPCとは、人間では無くAIを搭載したPCの事だ。ゲームを盛り上げる為の脇役と言ってもいい。

「……あそこ高いんですもん」

「本当ゴメン……今度は更に安くしてやるから機嫌治しておくれよ」  
「ホントですか!？」

勢いよく笑うミイナ。ゲンキな少女だった。

「待つてるかな〜シオン」

東ゲートへ足早と向かうミイナ。

「あつ。居たっ」

目的の人物を見付けたミイナは笑顔で挨拶する。

「こんにちは〜シオン」

「やあ。遅かったねミイナ」

シオンと呼ばれた女性も微笑む。本名はルクシオン。《大剣士<sup>フレイド</sup>》と呼ばれる職業だ。ルクシオンはミイナと対象的で、隻顔に整ったスタイルの大人の女性だった。

「ごめんなさいーシオン！」

「いいよ。いつもの事だしね」

「むう。それどういう意味ですかあ？」

「言葉通りの意味かな……w」

全く正反対でレベルにも差があるのに二人は何故か馬が合い一緒にパーティを組んでいる。

「今日は何処に行くんですか？」

「ウインド高原のエリア4にでも行こうかなと思ってる。ミイナは行きたい所ある？」

「ううん！ いいですよ！ 早く行きましょっ」

ミイナにとって場所はまだ重要ではなくルクシオンが居れば何処でもいいのだ。

「はいはい引つ張らない」

世話好きの姉と手の焼ける妹。二人は回りから見て姉妹のようだった。

（今日も楽しい事があればいいな〜）

とミイナは暢気に思った。

「……む」

急に頭を抑えるルクシオン。

「どうしたんですかー？」

あまり心配しているようには聞こえない間延びた声でミイナはそう問い掛ける。

「……いや。何でもない……先に行つててくれ。私もすぐに行く」

「買い忘れたモノでもあるんですか？」

「ああ。そんな所だ……」

「分かりました。○（＾・＾）○じゃあ先行ってます」

先にミイナがゲートをくぐり、エリアに転送される。

それを確認した直後、

「……ぐ」

苦しそくに呻き、膝をつく。

「動き始めたと言うのか……私は……」

そう言い立ち上がる。

「ミイナ……君は私の願いを叶えてくれるだろうか……」

その顔には憂いと覚悟が浮かんでいた。

「ふう……」

ウィンド高原エリア4。そこに一人転送されたミイナ。

「勢いできちゃいましたけど……アタシ一人だと恐いです……」（＊

｜＊）

ミイナは戦闘が苦手なのだ。人であれモンスターであれ争い事が嫌いで、戦闘は避けられるなら避けて来た。

「シオン……早く来ないかな……？ ステータス確認しておこうかな」

プレイヤー      ミイナ

|       |      |
|-------|------|
| 職業    | 《剣士》 |
| LEVEL | 5    |
| LIFE  | 320  |
| SP    | 58   |
| AP    | 29   |

お世辞にも強いとは言えないパラメータだった。

|      |          |
|------|----------|
| ミイナ  | 《剣士》     |
| 武器   | エルダーレイピア |
| 盾    | 無し       |
| 頭    | フワリングリボン |
| 体    | ミステイアーマ  |
| 装飾品1 | シンティアの加護 |
| 装飾品2 | サンダーマーク  |

装備は非常に充実している。《エルダーレイピア》に至ってはかなりレアで攻撃力も高い。ルクシオンと冒険していた際に手に入れた物だが、本人が使い熟せていない以上宝の持ち腐れでもあった。

周りを見渡し、キョロキョロするミイナ。

「あれ……？」

遠目に誰かが立っているのが見えた。髪は長く、美しい白色をしていた。

（綺麗な人……でも、あれ？ どこかで見た気が……？）

一度会った人なら基本的にミイナは覚えている。しかもあんな印象深い人を忘れる筈が無い。

「あれ？」

もっ少し近付いてみようとして一歩踏み出した直後、その人は既にいなかった。

「《リターンフェザー》でも使ったのかな……？」

《リターンフェザー》とはダンジョンエリアから脱出するアイテムだ。しかし、彼女はアイテムを使ったようには見えなかった。

「まあ……いっか！」

即座に思考を切り替えるミイナ。基本的に楽家なミイナは難しい事を考えるのが好きではなかった。

「さて……シオンが来る間にアイテム採取しておこうかな」  
のんびり呟き、歩き出す。

「……ん？」

草村に光るアイテム。

「あ！ ラッキー」

拾おうと手を伸ばした直後、

「ひっ？」

草むらがざわざわと動いているのが見えた。風とは違う明らかなソレ。

「も、モンスター！？」

（ど、どどうしよう！？ に、逃げないと！？ アイテムは欲しい、でもでも ！？）

テンパリ気味であわてふためく、ミイナ。その為逃げ遅れてしまった。

「ひえ！？」

現れたのは、

「あ………」

《ミニベア》と呼ばれる小熊のモンスターだった。

「か、かわいいー！！」

愛らしい人形のような外見を持つが一応モンスターである。

「むゝ。抱き着いたりしたら駄目ですよね………」

それに倒さないとアイテムは取れない。

「………ううゝ。可哀相だけど………」

ゆっくりと怯えながらエルダーレイピアを鞘から引き抜く。

美しい白銀の剣に緑の紋様が施されている。

「ごめんなさい〜！ えーい！！」

その剣の美しさと裏腹に、ミイナは気合いの抜ける掛け声と共に振り下ろす。

キュウ！？

と一撃で消滅する《ミニベア》。このゲームで一番弱いモンスターだから当然だ

「や、やったあ！ やりましたあ！」

と喜んだのもつかの間。背後にいやーな予感を感じる。

「……えーと」

ゆっくり恐る恐る、振り向くミイナ。そこには怒りマークを浮かべた《エルベア》が居た。

ガルルル！

「ぐ、ごめんなさいーいー！！」

そう言ってミイナは脱兎の如く逃げ出した

「シオン！ 助けて下さいーいー！！」

「やれやれ……相変わらず面白いな。ミイナは」

一部始終を見ていたルクシオンは、助けようとはせずただ成り行きを見守っていた。

「ピンチになったら助けてあげるか……しかし、私も甘やかし過ぎたな……」

悲鳴をあげつつ逃げるミイナをルクシオンは呆れ顔で温かい目で見守っていた。

## A c c e s s 7 「管理者とレアハンター」

A c c e s s 7 「管理者とレアハンター」

「あら……困まれちった……」

狼のような外見を持つモンスター《ガウル》に囲まれたPCは暢気に呟いた。

少年のような少女のような中性的な顔は好奇心に満ちた表情を浮かべていた。白い髪は短く揃えられていて、活発な印象も受ける。

「ま……たまには運動<sup>バトル</sup>もいいか」

彼の手にはいつの間にか槍が握られていた。それをくるくると回し構える。

ぐがあー!!

《ガウル》の一体が焦れたのか白髪の少年に襲い掛かる。それを皮切りに全ての《ガウル》が一斉に飛び掛かる。

「円月彗尖」

繰り出される無数の突きが《ガウル》を串刺しにしていく。

ガア!!

背後に迫る《ガウル》も何気無く薙ぎ払われた槍がソレを打ち落とす。

槍の特製はリーチの長さとその攻撃範囲の広さにある。槍の特性を白髪の少年は十分理解し、圧倒的な数の差をモノともしなかった。「よっ、と」

気軽に放たれた神速の突きが最後の《ガウル》を串刺しにした。断末魔の声をあげる間もなく消滅する《ガウル》にPCはもう目も向けない。

「おお! 《上質な毛皮》! ラッキー!」

大喜びでアイテムを回収するPC。彼はレアなアイテムに目がない。

かった。

「さてさて……」

全てのアイテムを回収し終え、目の前の扉を見据える。  
女神の描かれた決して開かない扉だ。

「どうやったら開くのかなあ……この扉。レアモノの匂いがぷんぷんするの……ね。アズサちゃんもそう思うでしょ？」

誰もいない筈の後ろに問い掛ける。

「チッ。ばれていたか……《ミラージュコート》を使っていた筈だが……」

何処から共なく現れる女性PC。白地のマントと、白い鎧を纏っている。髪は深緑で少しウェーブがかかっている。鋭い目つきと眼鏡はよく言えば真面目、悪く言えば融通が聞きそうにも無い堅物な印象を受ける。

白地のマントにはクリエイト・ライフ社の紋様が施され、彼女がシステム管理者の一人である事が分かった。

「完全に隠れるなんて無理無理　それでなんか用？　アズサちゃん？」

「気安くちゃん付け等するな」

刺々しいアズサの物言いは二人が決して友好的な間柄で無い事を表しているようだ。

「相変わらず堅っいなあ……その内、石になっちゃうよ？」

「黙れ。今ここで消えるか？」

腰のホルスターに手を伸ばすアズサ。それを見て、白髪の少年は益々笑みを深める。

「やだやだ恐ーい。ボクも消されるのヤダからね。ただのエリア探索だよ。やましいコトは何もしてませーん」

「現在立入禁止のエリアに居るのか？　プロテクトまで破って置いて貴様は……」

爆発しそうな怒りを抑えたような声で質問するアズサ。それに対して白髪の少年は態度を変えない。



「あつれー？ そうだったけ？ やだなー。なら立て札でも立てて置いてよ。プロテクト？ ああ。あの障子紙みたいな奴のコト？ あはは！ あれがプロテクトならクリエイト・ライフ社のたがが知れちゃうよ？」

「貴様ああー！！」

「ぐっ……！？」  
自社を虚仮にされ激昂するアズサ。ホルスターに手を伸ばす、

しかしそれよりも速く白髪の少年の槍が彼女の喉元に突き付けられていた。

「遅いよ？」

悔しそうに呻くアズサを白髪の少年は笑みで返す。

「……ぐっ、この《ハッカー》が！」

「おいおい違うよ。ボクは《クラッカー》だ。ボク程度が《ハツカ》だなんて、《ハツカー》君に失礼だよ？ 一緒にしないでよね」  
そう言いながら、槍を納める白髪の少年。

「……」

睨み付けるアズサに、白髪の少年はやはり笑みで返す。

「しっかし……いきなりこの《クリフォーノ洞窟》を閉鎖するなんて……ユーザーから凄くクレームが来たでしょ？ 何があったの？」

昨日の夜は何を食べた？ のように気軽に重要な事を聞く白髪の少年に、

「……答える義理は無い」

と突っぱねる。

「そこを何とか……」

「……」

「公言はしないと約束するよ。ま、教えてくれなくても調べるケド」  
苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるアズサ。

やがて観念したのか、そもそも無駄だと思ったのかアズサは重々しく口を開く。

「……《Zero》が現れたと言う報告があった」

「！」

その言葉を聞き、白髪の少年の表情は驚きに変わる。

「……………それは驚いた。成る程……………キミ達が必死になると思った」

「我が社の信用も失墜する可能性があるから、何より利を損なう可能性がある至急調べるとの命令だ」

「いけ好かないねえ……………相も変わらず上層部の方々は」

「……………それでもこの世界の為になるなら」

それがアズサの心からの本心だ。その答えに満足したのか、

「……………ま、頑張ってね。ボクも応援してるよ」

そう言いながら白髪の少年はアズサに背を向け、歩き出した。

（応援、か……………とんでもない皮肉だな……………）

何を企んでいるか分からない白髪の少年を彼女は見送るしかなかった。

「ああ、そうだ」

と何かを思い出したかのように立ち止まり振り返る白髪の少年。

「なんだ？」

「アズサちゃん。《Zero》って何だと思う？」

「……………只の悪質なウイルスだ。消滅させるべきイレギュラーに過ぎない。まあ貴様もその一つだから」

たっぷり皮肉気にそう言うアズサに、

「……………そうだね」

白髪の少年は少し、淋しそうに見える表情を浮かべた。

「……………？」

怪訝な表情を浮かべるアズサに白髪の少年は再び背を向ける。

「……………《虚無の騎士団》はどう出るかな？」

「……………奴ら、か」

「まあ……………そこを含めてゼロエターナルオンラインだよ」

「蒼樹……………貴様は何を企む？」

蒼樹と呼ばれた白髪の少年は再び微笑む。

「さあ……………ボクの価値観は面白い面白く無いか……………それだけだよ」

そう言って歩き出す蒼樹。

「キミは面白いよ」

蒼樹の呟くような声は誰にも届かなかった。

「……………さて、と」

タウンに戻る転送装置まで戻った白髪の少年は、再び好奇心に満ちた表情を浮かべる。

「不謹慎だけど楽しくなってきたなあ……………シュージ君もエンジョイしてるかも……………ね」

そう呟き、蒼樹は転送装置に姿を消した。

## A c c e s s 8 「深淵」

A c c e s s 8 「深淵」

闇よりも暗く、深い。何一つこの場では黒く埋もれてしまつてあ  
るう、それほど深い深淵だった。

そんな場所で朱いマントの男は佇んでいた。

「やはり……ここに居たか。レイアス」

その深淵によく響く声。姿は見えないが、レイアスと呼ばれた男  
にはそれが誰か解っていた。

「……お前か。何か用か」

「聞かないと解らないか？」

怒りを抑えたような声にレイアスは笑みを浮かべる。

「……さあな。見当も付かない」

「レイアス!!」

その言葉に声は激昂する。

「《騎士団》と《鍵》を使って何をしようとしている!? お前は  
一体……何をしようとしてるんだ!？」

「……………」

「今なら間に合う! ……………だから!」

その声に笑みを深めるレイアス。

「俺は………全てを手に入れる」

「……………な、に？」

「《Zero》を、《女神》を、そして……《世界》を!」

初めて感情を露にしてそんな狂気じみた事をレイアスは言った。

「レイアス! お前……………!」

「ここで戦つか? 私の《神紅》とお前の《深緑》……………どちらが上  
か……………」

「……………」

その挑発に声は押し黙る。その闇の中に沈黙が広がる。

「……………くっ！」

先に言葉を発したのは声の方だった。

「……………ここでは戦いたくない」

「賢明だな……………女神の御前だ」

「……………お前とも……………戦いたくない！」

「……………」

「だが……………次に会う時は《敵》だ。絶対にお前を止める！」

「ふっ……………せいぜい楽しみにしておく」

「……………さらばだ……………友よ」

「……………」

もうその声は聞こえない。この深淵から去っていったのだろう。

「本当に……………甘い男だ」

そう言うレイアスの表情は昔を懐かしむような優しいものだった。

「まだ……………俺を友などと言うとは……………」

俺はもう戻れないさ……………」

そう呟くと、レイアスは再び無表情に戻る。

感情を消してしまったかのように……………」

「……………」

地面も空も関係無い場所を歩き出すレイアス。

何かの前に立ち止まり、恭しく跪づく。

「……………女神よ。私は貴女を手に入れる」

ソレは茨と鎖に巻き付かれたこの世界の女神だった。

瞳は閉じられているが、あどけなく美しい顔立ち。この深淵の中でも美しく輝いている。その顔は悲しみに彩られていた状態で動かない。そのまま時が止まってしまったように。

「私では……………《勇者》にはなれなかった。だから……………」

立ち上がり、再び狂気じみた笑みを浮かべるレイアス。

「貴女を《魔王》として迎えにいく。必ず……………だ」

決意。それはある意味……悲壮な決意だった。

《ゼロエターナル・オンライン》

それはゲームなどでは無かった……

Access 9「愚者と言つ名の旅人」THE FOOL」

Access 9「愚者と言つ名の旅人」THE FOOL」

ここは……真つ黒だ……何も見えない。一体俺は……？

軀が沈んでいく。

冷たい沼に沈んでいくように。

そうか……変なモンスターに襲われて……それで、梨依菜に……

梨依菜はどうなったんだろう？

どうして……梨依菜は……

ゲームオーバーになったのか……

……死ぬの……かな？

「……% %い」

え……？ 誰？

真つ白な少女がオレの前に現れる。暗闇がよりその姿を鮮明にする。その表情は無表情だったが悲しそうに見えた。

何を言っているか分からない。よく聞き取れない。

「ご% #……い」

やはり聞き取り辛い。

何を言ってるんだ……？ 君は……一体？

「手を……して」

……彼女が何て言ったか……オレには聞き取れなかったけど、無意識に手を伸ばす。

「% に……わしの %片を 貴方に」

それと同時にオレの身体が光に包まれる。温かい……蒼い光だ。

「ごめんなさい」

その声はハッキリとそう聞こえた。そう思うと視界が真っ白に染まっていた。

それが……オレ……シュージと白い少女との出会いだった。

ウィンド高原エリア4。

「……………」

シュージは草原で目を覚ます。身を起こそうとすると身体の節々が痛む。

「……………ここは？」

とても温かく、穏やかだ。草の匂いが眠気を誘う。状況が掴め無い。一体ここは……

「……………夢？」

先程のは全て幻だったのか……？ 白い女の子に会ったのも、梨依菜が……消滅したのも、

「……………！？」

フラッシュバックする悪夢のような光景。

触手に貫かれるミイナ

そして、

黒い光が全てを……………

「……………梨依菜の何処に消えた？」

違うエリアに飛ばされたのだろうか？

違う……シュージがそう思っていただけだ。

リーナは。梨依菜は……



「……どうなってるんだよ………！　　そうだ…… ログアウト、ログアウトすればいいじゃないか！」

そこでようやく気付く。身体の節々が痛む？　ここは温かい？　草の匂いがする？

「え………？」

痛みを感じる。

気温を感じる。

匂いを感じる。

五感が今ここに存在する。

それは決して有り得ない。有り得ない断じて有り得ない事だ。

「ログアウト…… 出来ない………？」

つまりそれは…… 秋島終時がこのゲームに存在する事…… ゲーム内に閉じ込められたと言う信じられない事実だった。

事実がそうでも中々頭が追いつかない。

「甘えんなよ…… 俺！　これゲームじゃない！」

そつりーナが消滅したのも白い少女も全て、

「現実なんだ…… クソッ」

とりあえず現状確認をしようとメニューを開く。  
画面が現れる。

（ここまで普通に出来る。あつた筈のログアウトの項目が消えてる…… ステータスを開くか……）

|       |                   |
|-------|-------------------|
| プレイヤー | シュージ              |
| 職業    | マジックナイト<br>《魔法剣士》 |
| Level | 10                |
| Life  | 415               |
| SP    | 65                |
| AP    | 54                |

「え……………」

シュージの職業が変わっていた。《魔法剣士》、昔は《剣士》だった筈だ。

「そ、装備は？」

|      |          |
|------|----------|
| シュージ | 《魔法剣士》   |
| 武器   | ブロンズソード  |
| 頭    | 革帽子      |
| 身体   | ブロンズアーム  |
| 装飾品  | 壊れたペンダント |
| 装飾品  | 無し       |

「……装飾品の……リーナのペンダントが……壊れてる」

効果は全く使いモノにならない。シュージはそれを血が滲む程握りしめた。

「……リーナ」

もう一度リーナと逢えるまで。

「……一度……タウンに戻るか……」

とにかく情報を集めなければならない。あの黒いモンスター、白い少女。そしてリーナ。

（俺が生きてるんだ……アイツだって……）

考える事は山積みだ。ゆつくりと考えよう。  
少なくとも今は、そうする他無い。

「……………」  
回りを見渡す。長閑な草原が広がっていて、遠くには小川が流れている。

（長閑な場所だ……昼寝とかしたら気持ちよさそうだ……）  
もっとも今のシュージにはそんな余裕は無いが。

「……………いゝゝ」  
「……………ん？」

遠くに誰かの悲鳴のような物が聞こえ、その方向に目を向けると  
「いつ！？」

シュージに視界にあるモノが飛び込んで来た。

「助けて下さいいゝゝ」

それは熊型のモンスター《バウルベア》に襲われる女の子の姿だった。その女の子がこっちに向かって来る。

「お、おい……………！？」

「助けて下さいですゝ」

シュージの後ろに直ぐさま回る女の子。

「な、ちよつ！？」

「な、何とかして下さいゝ」

困惑するシュージに涙目の女の子。後ろに回った女の子は戦う気  
ゼロだった。

「……………くつ。やるしかないのか……………！」

「が、頑張つて下さいゝ」

シュージは剣を抜き構える。これはもう遊びじゃない！

相手の様子を見据える。《バウルベア》は攻撃力は強いがスピードは無い。ならば、

（先手必勝！）

「……………はぁ！」

シュージは《バウルベア》の懷に飛び込み斬り掛かる。

ガア！？

《バウルベア》が驚きのけ反る。その隙を逃さずに斬り込む。  
『調子に乗って攻めない』

「！」

脳裏に走ったそんな言葉に弾かれたように下がるシュージ。

ガア！！

今まで居た場所に《バウルベア》の腕が振るわれた。豪快に振るわれた一撃が外れた為の態勢が崩れる。

（今だ！！）

横薙ぎに振るわれたシュージの剣がバウルベアを斬り裂いた。そのまま消滅し、アイテムが現れる。

「……ふう」

リーナに教わった事が役に立った。

「つと。大丈夫か……？」

膝を着いて呆然している女の子に目を向ける。

「……………」

女の子はその場から動かない。

「まさか……怪我でもしたのか……？」

「すっごい～～（＾Ｏ＾）／！！」

「……！！？」

鼓膜に響く程の大声でそんな事を言った。

「凄いです！ スパツと現れてズバツと撃破……私とあんまりLe  
veeが変わらないのに凄いです～（＾Ｏ＾）」

「……えーと」

そのテンションの高さに一歩退くシュージ。

「どうすればあんな風に動けるんですかぁ！？」

「ち、ちよつと落ち着いて……」

一歩退いたシュージに女の子は更に詰め寄る。女の子に詰め寄られて、ドギマギするシュージ。

（ちよっ！ 胸……当たってる！）

ゲームとは言え感触はリアルに柔らかい。顔が熱くなるのを感じる。

「あれ……？ 顔が真っ赤ですよ？ まさか状態異常に！？」

ある意味男なら仕方ない状態異常である。

「違う違う！ いいから離れてくれ……」

「？ はい」

ようやく一歩下がってくれた女の子にシュージは息を吐く。

「それで、大丈夫か？」

落ち着いた女の子に再びシュージは安否を尋ねた。

「はい（＾Ｏ＾）／ 大丈夫ですよぉ！」

「そうか……よかった」

心の底から安堵するシュージ。誰かが傷付く所はもう見たくは無かった。

「ああ！ 申し遅れました！ アタシはミイナです！ 《剣士》です！ 助けていただきありがとうございます！」

「ああ。オレはシュージ。《魔法剣士》だよ」

お互いに自己紹介をする二人。シュージの職業を聞きミイナは首を傾げる。

「《魔法剣士》？ 聞いたコト無い職業ですね？ はっ！ もしかしてレア職業ですか！？」

「……まあそんな感じかな」

本当の事を言わずにそうごまかすシュージ。

信じて貰える筈も無いし、なによりも、

（巻き込みたくないしな）

無関係の人をあんな事には巻き込みたくない。あんな事になるのは、もう二度と……

「どうしました？ 顔色……悪いですよ」

「あ、ああ。大丈夫……オレは大丈夫」

心配そう顔を覗き込まれ再びシュージは赤面する。

「あ……えっと、此処って何処なんだ？」

それをごまかす為にシュージは、そんな事を聞いた。場所が解らないのは事実だった。

そんなシュージに質問に、ミイナは不思議そうな顔をして、「何を言ってるんですかあ？　ここはウィンド高原ですよ？　あ、エリアは4です」

そう答えた。

「……………」

（オレがさっきまでいたのは《クリフォーノ洞窟》……一体、どうなってるんだ？）

考えれば考える程理解不能な状況だった。

「長閑でいい場所ですよ〜。《真蒼の剣》もここにあるんですよ？」

「《真蒼の剣》？」

「知らないんですか？　ゼロエターナル・オンラインでは結構有名な話ですよ？　えーと確か……………」

「世界は女神の為に存在する」

「！！」

凜とした印象を受ける第三者の声にシュージとミイナは振り向く。そこには銀髪の長い髪を纏めた美しい女性が立っていた。左目には装飾の施された眼帯。右目の鋭い瞳は凜とした印象を受ける。

（あれ…………？）

そんな彼女を見てシュージは違和感と言うか奇妙なモノを感じた。シュージの心情はお構いなしに彼女は物語の語り部のように、詩を謳うように語る。

「女神は世界の為に存在する。

世界を護る力。女神を護る力。

鍵はその手に。想いはその力に。

その手その想い　三つの矛とならん。

一つは創世の神紅の剣。闇より深き影の神の身許に。

一つは破戒の真蒼の剣。女神見守る大地の丘に。

一つは改変の深緑の剣。深く蒼き森の中に。

この剣を持って人は女神を救わん。

この剣を持って人は世界を救わん。

神極の鍵三つの力を持って現れん」

言い終えると彼女は一度息を吐き、

「これはこの《世界》に伝わる伝説と言う奴だ。所謂設定いわゆゑと言う奴だが、そう言う面白みが無い……そう思わないかい？ シュージ君？」

（どうしてオレの名前を……初対面の筈なのに……）

「シオン！」

そんな疑問を口にする前にミイナが嬉しそうな声をあげ、彼女に抱き着いた。

「……知り合いなのか？」

「ああ」

「はい！ ルクシオンとは大親友なのです○（＾・＾）○！」  
嬉しそうに誇らしそうにそう語るミイナ。

「……………」

（なんだろう……この感じ……）

シュージの胸につつかえるような奇妙な感じ、自分でもよく分からない感情にシュージは戸惑う。

「そんなに警戒しなくてもいいよ」

そんなシュージの心情を悟ったかのように微笑むルクシオンと呼ばれた彼女。

「私はルクシオン。シオン、そう呼んでくれ」

そうして彼等は出会った。この出会いが……後に彼等の運命を変える事に、彼等はまだ気付いてはいなかった。

## A c c e s s 1 0 「真蒼の剣」

A c c e s s 1 0 「真蒼の剣」

「それより、ミイナを助けてくれてありがとうございます」

「ありがとうございます！」

「あ、ああ」

二人に御礼を言われ、どきまぎするシュージ。異性に褒められるのは慣れていないのだ。

（それにしても……）

シュージは再び、ルクシオンを見る。紅い切れ長の瞳に、銀髪を一つに纏めた姿はミイナと違い大人の魅力を感じる。

（いや……そういう事じゃなくて……さっき感じた違和感は？）

先程ルクシオンに感じた奇妙な違和感は、既に彼女からは感じなかった。

（一体……何だったんだ？）

無意識にシュージはルクシオンの顔を見詰めていた。その視線にルクシオンは気付き、

「む。なんだ？ 私の顔に何かついてるか。いや……PCの我等には有り得ない事だな。さては私に惚れたか？」

そんなとんでもない事言い出した。

「そうなんですかつ？」

ミイナが食いつく。詰め寄られそうになりシュージは一歩下がりながら、

「ち、違う……！ そんなんじゃないって！」

慌てて手と頭を振って否定する。

「違うのか……残念だな」

本気で残念そうに肩を落とすルクシオン。



「……………」

（どういう人なんだ？ ルクシオンは……）

どこか人を喰ったような、人を煙に巻くような態度だが、不思議な事にそれが不快では無かった。

（やっぱ考え過ぎか……）

シュージはそう結論付ける事にした。少なくともルクシオンは悪い人には見えない。それだけでも十分だ。

「まあなんにせよ何か礼をしないと……」

「い、いや……気にしなくていいよ。それより『真蒼の剣』って一体なんなんだ？」

先程の話しに出て来たその単語がシュージには気になっていた。

「ふむ。では礼代わりに教えてやろう。所謂、伝説の剣と言う奴だよ。エクスカリバーのようなモノかな。このウィンド高原の『女神の丘』に刺さっている。未だかつて抜いた者はいない。私もミイナも試したが駄目だったよ」

冗談めかしてルクシオンは解説する。エクスカリバーが何の事かは分からなかったが。

「女神会う鍵とも言われているな。剣は3本あるとされる。『深緑の剣』。『神紅の剣』。そして『真蒼の剣』だ。その3本集まれば『女神』が現れると言う」

「女神……」

ルクシオンの話を聞き、ふとシュージの脳裏に黒い闇の中に居た少女の事が頭に浮かんだ。

（あの黒いモンスターに襲われた後に逢った女の子……あの扉にあった絵の『女神』にそっくりだった）

不思議な雰囲気を持っていた少女。あの黒いモンスターにも何か関係があるのかも知れない。

（そして……あの声。何かを捜せと言っていた……）

『女神を捜せ、 % したら% x ！！』

あの時はよく聞こえなかったが声の主はそう言っていた気がする。

（だったら……もう一度……あの子に逢えれば、手掛かりが掴めるかも知れない。手掛かりを探していればリーナにも……）

そこまで考えシュージは決意する。その為にはその《真蒼の剣》とやらが必要になるかもしれない。

「……………」

「……。いい瞳だ。何かを追い求めると言う瞳は何よりも輝く」  
楽しそうに語るルクシオン。興味深くシュージを見つめ返す。

「いいだろう。案内しよう ミイナもそれでいいか？」

「はい！ 大丈夫ですよ！」

一方なんの事が分かっていないミイナは脳天気によく答える。  
「……………いいのか？」

二人の予定を邪魔してしまってもいいのだろうか？

そんなシュージの心配は、

「ああ。どうせ暇なのだ」

あっけらかんと言い放たれたルクシオンの言葉で消え失せた。

「では早速行こうか……とその前に」

《ミイナとルクシオンのメールアドレスを受け取りました》

「？ これは？」

「アドレスだ。これでいつでも私達と連絡出来る。活用したまえ」  
「ですす！」

「……………」

楽しそうに言う二人と対象的に押し黙るシュージ。

「どうしたんですかあ？ シュージさん怖い顔して？」

「メールって……どうやるの？」

「「は？」」

ミイナとルクシオンの目が点になった。

「……まさか、この時勢でメールを使えない男を初めて見たぞ」  
心の底から呆れたような口調でそんな非難をシュージに浴びせる  
ルクシオン。

「アナログって感じで、格好いいですよっ」

「余計なお世話だよ……ミイナのはフォローになってない」

たつぷり二人に教えられる事30分。ようやくメールの使い方を  
覚えたシュージは、二人と目的地を目指していた。

「そういえば私のステータスを見ておくか？ パーティーを組む上  
では知っていた方がいいだろう」

「ん……そうかもな。頼むよ」

「ああ」

そう言っただけでルクシオンは現れた画面を操作する。

プレイヤー      ルクシオン

職業      フレイト  
            《大剣士》

Level      25

Life      1790

SP      168

AP      995

「……強い」

「はい！ ルクシオンはとっても強いんですよ（><）o!」

「……誰かさんが戦わないから……さて次は装備だが」

ルクシオン      《大剣士》

武器      鬼滅剣

盾      装備出来ません

頭      闘気的眼帯

身体 闘鬼の革鎧

装飾品1 シンティアの加護

装飾品2 シルバーアंक

「ま……こんな感じか」

「強そうな装備だな……」

「実際強いんですよ！o（^ - ^）o！」

「いやミイナ……君のかなり強いんだかな……しかし、レベルが低いがシュージ君は強いな。先程の戦い見させて貰ったが見事だった」

「ええ！？ 見てたんなら助けて下さいよぉ〜！」

「つい……な。必死に逃げる姿が愉快で……」

「シューオン！」

「……ぷっ」

そんな二人を見てシュージは思わず笑いがもれる。

「あー！ 笑い事では無いですよー。シュージさん！」

「いや……二人共仲がいいなと思って……」

ほほえましい仲のいい姉妹のような二人を見て、シュージは久しぶりに笑った。

「はい！」

誇らしそうに、嬉しそうに元気よく言ったミイナ。

「……ああ」

それにルクシオンは静かに答える。

彼女もまた嬉しそうに笑った。

（……あれ？）

でもどうしてか、その笑顔にはどこか寂しそうな顔が隠されているようにシュージは感じた。

「ん？ どうした？」

「い、いや。なんでも無いよ」

「そうか。では二人共行こうか」

「はい！」

「……………」

歩き出す二人を見ながら、

（さっきの表情は何だったんだ？ 嫌そうとかじゃないけど……………今は気にしている場合じゃないか）

そう思いシュージも二人の後を歩き出した。

あの笑顔の意味をシュージは今は分からなかった。

A c c e s s 1 1 「深く蒼き闇の中で」

A c c e s s 1 1 「深く蒼き闇の中で」

「さて……私達はパーティーを組む訳だが」  
ルクシオンはそう言って話を切り出した。  
「？」

疑問符を浮かべシュージはルクシオンを見る。それをルクシオンは確認すると、にやりと笑った。

「リーダーはシュージ君。キミだ」

ルクシオンはびしっとシュージを指し、そう言った。

「……は？」

突然のそんな突拍子の無い台詞でシュージの思考がストップする。

「いいですね！」

ミイナも両手を挙げて賛同する。

「つて待て！　なんでオレ！？」

ようやく意味がわかったシュージは直ぐさま反論する。普通はレベルの高いルクシオンがリーダーになるべきでは無いのだろうか。そんなシュージの疑問は、

「私は指揮が苦手だ」

一刀にばつさりと切り裂かれた。

「でもだからって……！」

「ミイナに出来ると思うか？」

「う……」

ミイナがリーダー？

そう思いミイナの方を見る。

「？」

可愛らしく首を傾げるミイナ。何かとあれば転んでしまいそうな

女の子がリーダー？

「無理」

「速いです！？」

思考時間一秒。想像すら必要無い程、無理だ。

「そうだ。無理だ」

何よりも力強くルクシオンは肯定した。

「シオンも肯定しないで下さいいゝ！」

親友にも見放され、涙目になるミイナ。捨てられた子猫のような目だったが、シュージにも氣遣う余裕は無かった。

「オレにだって無理だよ！ ゲームだって始めたばかりで……」

「経験は関係無い」

「でも……！」

なお反論しようとするシュージにルクシオンは、

「要はキミが信用出来るか否か。それだけだ。キミは十分に信用に値する」

真剣な口調でそんな決め手になるような事を言った。

「……………」

「ぶっちゃけるとミイナのお守りが一人だと面倒なのだ」

「ぶっちゃけられました！！？」

酷くショックを受けるミイナ。不幸な事に誰も見ていなかった。

しばらく従順するシュージ。信用される事は嬉しい。だけど、

（オレなんかに……出来るのか？）

「出来なくともいい」

「！」

シュージの心を読んだようにルクシオンは笑いながらそう言った。

「最初っから出来る奴なんていないよ。だから大丈夫だ」

更に積み掛けるように、そんな事を言うルクシオンに、シュージは

「……………わかったよ。出来るかどうかは分からないけど」

覚悟を決め、そう言った。

「出来るさ。キミには器がある」

「そうですよお。シオンが言うから間違いないです」

「気楽に言うなあ……」

そんな二人にシュージは溜め息を吐いた。

シュージにとっては幸いな事に一度もモンスターは現れなかった。  
「さて……そろそろ着くぞ」

ルクシオンにそう言われ、シュージは歩く速さを少し早めた。

数分後。

「ここが《女神の丘》だ」

「……………」

「どうしたんですか？」

「い、いや。凄い綺麗な景色だなと思って」

シュージは感動を越え圧巻されていた。

三人の目下に広がるのは、雄大な自然。美しい緑の草原が遥か彼方で広がり、小川が至る所に静かに流れている。

見る者を圧巻させる美しい自然の光景だった。

（言葉にならない美しさって言うのはこういう景色の事を言うんだろうなあ……）

掛け値も無く、心からシュージはそう思った。

「そうですよね！　綺麗ですよ〜。アタシが一番好きな場所なんですよ」

ミイナは自分の事のように嬉しそうに笑った。

「《女神》様のお気に入りでもある。この雄大な自然は彼女の最高傑作なのだろう。故に《真蒼の剣》をここに封印したのかもな」

「シオンはロマンチックですね〜。アタシはピクニックとかしたいです」

「……………」

（……………リーナ）



リーナは、こんな綺麗な景色をシュージに見せる為に彼をこのゲームに誘ったのかも知れない。

「……………」  
悲しそうなシュージの表情をルクシオンは黙って見詰めた。

「これが……《真蒼の剣》？」

雄大な丘の上に刺さる、古ぼけた剣。鞘ごと台座に突き刺さっている。

「ああ。この世界の伝承の剣だよ」

「……………」

シュージはゆっくり導かれるように、その剣の柄に手を掛ける。

（オレは……リーナを見つけない！ その為にも……力が欲しいんだ！）

その様子をミイナとルクシオンは固唾を飲んで見守る。

そして、思い切り力を込めて、

「……………っ！？」

シュージの身体が光りに包まれる。

そして、視界が真っ暗になった。

「え？」

そこにミイナとルクシオンの姿は無く深く蒼き闇が広がっているだけだった。

「……………ここは、一体？」

周りには深い闇が広がっているだけで何も見えない。

「勇者……さま」

突然響いた声にシュージは慌てて振り向く。

「x……………」

そこに居たのは、深い闇の中でも美しく、そして儚げに輝くあの白い少女だった。

白い少女はじっとシュージを見詰める。

「きみ……は？」

少女の美しさに魅入られながら、シュージは聞いた。

「……し、は《レイ》」

「レイ……それがきみの名前なのか？」

《レイ》。そう名乗った少女はゆつくりと頷いた。

「教えてくれ。あの黒いモンスターは何なんだ？　そして、リーナは……梨依菜はどうなったんだ？」

シュージの質問に《レイ》は悲しそうな、泣きそうな表情を浮かべる。

「……………ごめんな、さい」

「なんで……きみが謝るんだ？」

理解出来ずにシュージはそう聞くが、《レイ》は悲しそうな表情を深めるばかりだった。

「%……《Zero》…は、%x」

《Zero》。

他の言葉は聞き取れなかったがそれだけは解った。

「《Zero》……？　それが……アイツの名前なのか！？」

悲しそうな表情を変える事無く、《レイ》は頷いた。

「なあ……教えてくれ！　オレは、何をすればいい？　どうすれば、梨依菜を……！？」

その言葉は最後まで言えなかった。

何故なら口を塞がれたから。《レイ》の柔らかな唇で。

シュージと《レイ》の姿が重なる。

数秒間、二人は口付けを交わしていた。

「……………」

《レイ》の方から静かにシュージの唇から離れた。

「……………」

シュージは自分のされた事を理解出来ずに、思考が真っ白になっていた。

そして、たつぷり数十秒。ようやく、

「~~~~~?!!!!」

シュージは自分がキスされた事に気付いた。

「な、ななな！ ええ！？」

キス？ 女の子と？ というかファーストキス？

シュージの思考回路が壊れそうになる。

「！」

シュージの身体に異変が起きる。熱い何かが全身を刻んでいく感覚だ。

「ぐっ……なんだ……コレ？」

痛みと共に、何故か力が湧き上がって来る。

一体……何が起きてるんだ。

「%」の……。貴方は……。私を、×してくれる。信じてるから」

「…待ってくれ。一体……何を言ってるんだ」

「貴方の大切なヒトは……。まだココに居る……」

「……え？」

「この世界は、私は、貴方達を祝福する。だから、」

「……」

「貴方は……私の勇者になってくれますか？」

少しだけ、ほんの少しだけ《レイ》は微笑んでそう言った。

視界が、今度は白く染まっていく。

「！？ 待ってくれ！ まだ、聞きたい事が！」

その声は届かず、シュージの身体は光りに包まれた。

## A c c e s s 1 2 「破壊の翼」

A c c e s s 1 2 「破壊の翼」

青い光に包まれたシュージをミイナは呆然と見詰める。

「綺麗……」

吐息のように思わずそんな言葉が漏れる程その蒼い光は美しかった。

「……………」

ルクシオンは複雑そうな、残念そうなしかし何かに期待しているかのようなそんな表情。

（女神……貴方はシュージ君をも選ぶつもりか……）

蒼い光に包まれるシュージを見詰め、ルクシオンは憂うようにそんなコトを思った。

「シ、シオン！」

ミイナの叫ぶような声が辺りに響く。

「どうした　！？」

何事かとルクシオンが振り向くと、

「！ 《キラーマンティス》！？」

巨大なかまきり蛸螂を思わす虫型のモンスター《キラーマンティス》がそこに現れていた。

ボスクラスのモンスターでその鎌による攻撃は非常に強力。俊敏性も高く知能も高い。

「何故……このエリアに！？」

大剣を構えるルクシオン。《キラーマンティス》は本来初心者向けサーバーに現れない筈のモンスターだ。

（今シュージ君に近づかれては……）

あの状態では何も出来ないだろう。そして、恐らくシュージはあ

の状態でライフがゼロになれば……

「シオン！ アタシは……」

「ミイナは下がっている！ 私が斬る！」

キシャアアアア！

甲高い声を上げ《キラーマンティス》は襲い掛かってくる。

「悪いが……手加減はしない！ 聖霸烈震！」

ルクシオンは大剣を地面に突き立てる。

それを中心に光の爆発が起きた。

シャアア！

ダメージを受けのけ反る《キラーマンティス》にルクシオンは、

「剛・一閃光！」

追撃のスキルを叩き込む。一瞬で間合いを詰め、気を纏った大剣を振り下ろす。

ギイ！

「ぐっ！」

しかし、その大剣は《キラーマンティス》の左腕の鎌に受け止められた。

そしてルクシオンが反応するよりも早く《キラーマンティス》は残りの鎌を振るった。

「ぐっ！」

《キラーマンティス》の鎌がルクシオンの身体を深く刳った。

「ちい！」

大きく後ろに跳び追撃を躲す。

（思ったよりライフを削られたな……だが！）

それは致命傷にはならない！

再び、大剣を構え《キラーマンティス》に飛び掛かろうとするルクシオン。

だが、

「……………な？」

身体が痺れて動かない。思わず膝をつくルクシオン。この状態異

常は……

（麻痺……！？ 私としたことが！）

動かない身体。ルクシオンはゆっくり迫る《キラーマンティス》を睨むコトしか出来ない。

（ここで……ゲームオーバーになる訳には……！）

動かない身体を無理矢理動かす。弱々しく大剣を構えるルクシオンに対し《キラーマンティス》は両の鎌を、

「！」

振り下ろす事は出来なかった。

「たあああああ！」

その叫びと共に《キラーマンティス》に斬り掛かったミイナがそれを妨害したのだ。

「な！」

余りにも意外な光景にルクシオンは絶句する。

「狼牙瞬風脚う！」

流れるように回転しながらミイナは剣と蹴りを振るう。

《キラーマンティス》は全ては躲せずに、確実にダメージを与えられていた。

「ええーい！」

怯んだ《キラーマンティス》にミイナは剣を突き立てた。

キイイイイイイイイイイ！？

甲高い断末魔の声を上げ、《キラーマンティス》は崩れ落ちた。

「はあ、はあ……」

肩で息をするミイナ。実際に疲れているかの様子だった。

「ミイナ。よくやった！」

ルクシオンは賞賛の声をあげる。

「あ、アタシが……倒したんですか……？」

自分のやった事が信じられず、呆然とミイナは呟く。

ルクシオンが負けそうになり無我夢中で剣を振るったのだ。

「やったあ……」

安心して膝をつくミイナ。完全に安堵し、彼女は倒れたモンスターから視界を外した。

「！ ミイナ下がれ！」

「……え？」

そのルクシオンの警告は一步遅かった。  
ざしゅ。

「……あ」

いつの間にか立ち上がっていたキラーマンティスの鎌がミイナの身体を両断した。

「い……？」

その瞬間、ミイナの身体に激痛が走る。

「ああああああー！！？」

肩から腰にかけて走る理解不能な激痛に、ミイナはのたうつ。

「ミイナ！」

（何故だ……確かに奴はミイナが止めを刺した筈だ……まさか！）

ルクシオンはキラーマンティスを凝視する。

キラーマンティスの軀が黒く変色していく。いや、塗り潰されていく。

キ x | ||||| ! !

狂ったような奇声を上げるキラーマンティスは黒いシルエットと化していく。

「……《Zero》！」

ルクシオンは悍ましいその名を呼んだ。

「！」

その次の瞬間、シュージの蒼い光が弾け飛んだ。

「！」





「女神に選ばれた者の力が……」

そしてその剣は黒く侵されたモンスターを二つに両断した。

「はぁ……はぁ……」

シュージは身体の痛みが消えていくのを感じながら、意識を失った。

「……始まったか」

倒れるシュージを支えながらルクシオンはそう呟いた。

「虚無の物語が……」

その独白は誰にも届かず大気に消えた。

### A c c e s s 1 3 「深緑の剣」

E r r o r 1 『闇への誘い』

%           工%ア。

ココは……何処だろう……？ わたしは……死んだのかな……  
闇が……何がわたしを包んでる……  
本当は帰りたくない

……そんな事は……無い。わたしは……  
……ここなら自由に動ける  
わたしは……ただお兄ちゃんと……  
嘘……違う……本当は……

……  
永遠に……ここに居たい  
……そうわたしは……  
「驚きましたねえ。ここまで《Z e r o》に侵されながら、未だ意識を保っているとは」

……誰……？

「ふふ……恐がらなくてもいいんですよ。虚無の世界に身を任せればいいんです……そうすれば、貴女は永遠に自由だ」

……わたしは、そう自由に。  
「忘れてしまふんです。苦しいコト等、辛いコト等。全て……捨ててしまば」

その言葉は、全身に甘美な蜜のようなわたしに染み込んでくる。  
わたしはわたしはわたしはわたしはわたしは……そうだ。最初から……

黒い闇がわたしに吸い込まれていく。わたしの軀も受け入れるよ

うに抵抗しない。

「

!!!!!!」

爆発するような感情。悦楽。歓喜。わたしの全身を凄まじい勢いで巡っていく。

「……素晴らしい」

その声はわたしを利用するつもりなのだろう。だけど……構わない。

猜疑心なんかそんなの忘れてしまっただけ、大切なナニカを忘れてしまっただけ……わたしは満たされていたのだから。

Access 13 「深緑の剣」

シア・アルテ。ソルティ大森林エリア3。

上級者向けのサーバーのダンジョンに男は佇んでいた。白銀の鎧を纏った。凜とした眼差しを持つ、美しい金髪を持った男性PCだ。  
「……………」

おもむろに鞘から剣を抜く。

その剣が緑に包まれていく。深く美しい森を思わせる深緑。見る者の心を落ち着かせるような深緑だった。

「《深緑の剣》が……呼応しているのか？ ……《真蒼の剣》が誰に渡ったと言う事か」

俯き、何かを憂うように。金髪の男。再び顔をあげる。金髪の男のその表情に決意が宿る  
「確かねばならないな」

金髪の男はそう呟き、踵を返す。

「リフィッド様」

そんな静かな声が森林に響く。女性PCがいつの間にかリフィッドの背後に居た。黒い装束には鎖が巻かれ、腰には短刀。彼女はこの世界では《シノビ》と呼ばれる職業だった。

二人は知り合いなのかリフィッドと呼ばれた金髪の男は驚いた様子はない。

「やはり。ここに居ましたか」

「リンか。ああ。ここは心が落ち着く」

穏やかな笑顔のリフィッドにリンと呼ばれた彼女は報告を少し迷う。

しかし、義務は果たさなければならない。

「……リフィッド様……《虚無の騎士団》に動きがありました」

「……そうか」

（動き出したか……レイアス）

悲しい表情を作るリフィッドにリンは思わず目を背ける。

そんなリンの様子にリフィッドは、

「心配かけてすまない」

「え……？」

「君達のリーダーである俺が、こんな表情をしちゃ駄目だよな。情けない」

微笑みながらそんな事を言うリフィッドにリンは慌てて首を振る。

「いえ とんでもありません」

（私はリフィッド様の為なら！）

と言う言葉をリンは飲み込んだ。その言葉はリフィッドの重荷なってしまうからだ。

優しい彼は、それだけでリンの為に命を賭けてしまうだろう。リンは彼の重荷にはなりたくなかった。

「本当に……俺は……」

「リフィッド様？」

「いや……何でもない。先に帰っていてくれ」

「は。しかし大丈夫ですか？ 《Zero》が現れたと言う噂もあります」

「問題はないよ。少なくともこのエリアにはいない。だが、ギルドのメンバーに戦闘に備えるよう伝えてくれ」

「……御意。お気をつけを」

そう言つとリンは大気に消えるようにエリアから消失した。

「……………」

リフィッドは再び、俯く。今にも泣いてしまいそうなそんな表情だった。

「レイアス……俺はおまえを止める。彼女も、そう望んでいるハズだ……………」

自分に言い聞かせるように、自戒するようにリフィッドは呟く。  
深緑の剣は何かを求めるように輝いていた。

## A c c e s s 1 4 「具現化」

### A c c e s s 1 4 「具現化」

「人生につてさ。ハッピーエンドなんか無いよね」

車椅子の上で携帯ゲームを弄りながら梨依菜はそう言った。

そう言えばこういう訳の解らない事を唐突に喋る妹だった。終時はいつも通り返す。

「何だよ……いきなり」

「だってそうでしょ？ 幸せになって大団円。現実には無理だよ。」

夢やお金や愛を掴んでハッピーエンドなんて選ばれた者の特権だよ。夢は叶わない。お金は生きていく最低限しか手に入らない。愛は冷めていくし……ね。ハッピーエンドなんてないんだよ」

そう言っつて梨依菜は携帯ゲームを取り落とした。梨依菜の両手が小刻みに震えていた。

「ね。だから人々は二次元や空想にハッピーエンドを求めるの。自分がそうであるかのように錯覚する為に」

「……じゃあ。梨依菜……お前は今幸せじゃないっていいたいのか？」

終時がそう聞くと梨依菜はくすりと笑った。

「そう見える？」

結局。あの時、梨依菜が何を言いたかったのか終時には分からなかった。

その時からあった梨依菜の闇。それを……終時は理解出来ていなかった。

「……………！」

梨依菜が遠ざかっていく奇妙な感覚。自分と梨依菜が冷たい闇に沈んでいくような錯覚。

必死に手を伸ばすが……

「梨依菜ああー!!」

その手は何も掴めなかった。

「……!!」

目が覚める。一瞬にしての覚醒。慌ててシュージは身を起こす。

「……あれ?　ここは?」

シュージの目に入っただのは木製の部屋。机や戸棚等、家具も揃っている。

シュージ自身も自分がベットに寝ていた事に気付く。

「……ここは、どっちだ?」

ゲームが現実か。一瞬分からなくなるが、

「……ゲームか」

壁に立て掛けてある自分の剣に見つけここがまだゼロエターナル・オンラインの世界に居る事に気付く。

「……なんで……オレ……」

こんな所に居るのかと疑問を感じた次の瞬間、

「……!!」

頭の激痛と共に映像が雪崩込んでくる。

忌まわしい黒いモンスターを見た瞬間、自分の中の何かが爆発した。蒼い光の剣……そして蒼い羽……

「何だってんだよ!　オレは……一体……!!」

意味が解らないまま事態は進んでいく。シュージの焦燥感は募るばかりだ。

「……そう言えば、シオンとミイナは……!!」

二人は無事なのだろうかと心配になった直後、シュージはある事に気付く。

自分の隣が妙に温かい。それにこの穏やかな寝起きと、このいい匂いは……

「……うえ！？」

隣にはすうすうと寝息を立てるミイナが居た。しかも下着姿で……

「えええ！ な、なな！」

赤面しつつ慌てて離れる。と言ってもここはベットの<sup>上</sup>。落下して腰を強かに強打する。

地味に痛いがそれどころではない。

「ななな…… な、なんなんだ

勢いで一夜明かしちゃったみたいな<sup>シチュエーション</sup>状況は！

「おやおや。随分楽しそうだな」

「……！」

聞き覚えのある声に振り向くと、にやにやと意地悪そうな表情を浮かべたルクシオンが立っていた。

「やつちゃったか？ いやなに、やるものだな」

にやにや顔を崩さずそんな下品なコトを言うルクシオンにシュージは即座に反論した。

「そんな訳あるか！」

「ゲームでも出来る仕様になっているらしいぞ？」

「嘘つくな！」

出来たとしても悲しい事にシュージにはそんな度胸はないだろう。

「……シオンの仕業か？」

「うむ。実にナイスリアクションだ」

「………はあ」

もはや反論する気力も尽き溜め息を吐くしかなかった。

「……それで、なんでオレはここに？ そもそもここは？」

「ふむ。倒れたから。私の@HOMEだ」

「はあ？」

「質問に答えたただだよ。君はあの力を使った後倒れた。だからミイナと一緒に私の@HOMEに運んだ」

「……一体……何が起きて……？」

シュージがそう言うところルクシオンは真面目な表情を作った。



「……長くなる。知っている事は全て話そう」

「ファンタマイズ  
《具現化》？」

聞いた事もない単語にシュージは聞き返す。

「ああ。ログアウト……この世界から出られなくなる現象をそう呼んでいる」

「……どういう事なんだ？」

「キミのPCボディとキミの身体が一体化しているんだ。だから五感がある。痛みも感じる」

「……一体……化……？」

それはつまり、自身がPCになっていると言うコトだ。そんなオカルトなコトが起こりうるなんてには信じられない。

だが、

（……オレは、確かにここに、この世界に居る）

それだけではどうしようもない事実だった。問題なのは、何故そうなってしまったのか、だ。

「原因は私でも分からない。ただ一つ《具現化》した者に皆共通点がある」

「……………」

ルクシオンのその言葉でシュージは思い出す。

このゲームに関する噂。

町で叫んでいた男。

そしてクリフォーノ洞窟でのあの出来事……

「黒い……モンスター」

異形。負の感情を凝縮したようなソレ。

思い出せば、悪寒が止まらない。そんなシュージを見てルクシオンは顔を強張らせ、

「黒いモンスター。《Zero》と呼ばれている」

「……《Zero》……」

「謎に包まれたウィルス生命体と言うのがシステム管理者の間で囁かれているが真否は分からない。《Zero》はモンスターに感染するようだ。」

そして、《Zero》に襲われ、ゲームオーバーになった者は例外なく《具現化》している」

「……どうして……」

「それは私にも分からない。何故プレイヤーを襲うのか。何故《具現化》なんて現象が起きるのか。システム管理者でさえ手に負えない状況だ」

「……」

「だが……これは事実で、現実だ。それを忘れない方がいい」  
現実。そう……これは夢でもゲームでもない。

ゼロエタール・オンラインは……ゲームなんかじゃない。

「《Zero》に関して分かっている事はそれだけだ。……少し休むか？」

気遣うようにルクシオンは言ってくれたが、シュージはそれより一刻も早く情報が欲しかった。

「……いや。大丈夫」

「なら続けよう。次の話は君の《チカラ》だ」

「……オレの、《チカラ》？」

「信じ難いコトに君は《真蒼の剣》を手に入れた。そして、《Zero》を消滅させた。通常の方法では《Zero》は倒せないはずだ」

蒼い剣と背中に生えた蒼い羽。無我夢中でうつすらとしか覚えていない。

「君は、《Zero》を打倒しえうる《チカラ》を持つと言う事だ」  
「なんで……オレにそんなチカラがあるんだよ……」

「……分からない」

「オレはただ……！ 梨依菜とゲームをしていたただけなんだ！ なのに……なんでこんな事に……どうしてオレなんだよ！」

叫ぶようにシュージは問う。堪えていたモノが爆発する。

「こんな訳の分からない事になるんだ！ オレは…… オレは！」

それを黙って聞きながらルクシオンは、

「シュージ君」

「……………」

「今……君が成すべきコトは自らの不運を歎く事ではない」

ルクシオンはシュージの剣を投げ渡す。突然の事だったがシュージはなんとか受け取る。

「前に進む。今の君にはそれ以外に選択肢はない。状況を変えようと……あがくしかない」

「……………」

「今は先程の話を整理しながら休みたまえ……休息も必要だ」

「……シオン」

シュージは背を向けたルクシオンを呼び止める。

「どうして……オレにここまでしてくれるんだ？」

それがシュージにとって一番気になる事だった。赤の他人であるハズのシュージにルクシオンは何故……？

「簡単なコトだ」

ルクシオンはくすりと笑い、

「人を助けるのに理由は要らない。君が私とミイナを助けてくれたように」

「……」

「ちなみにミイナは寝オチしているだけなので安心してくれ。ではまたな」

そう言い残しルクシオンは部屋を出ていった。

「……不思議な人だな。シオンって」

そう言ってシュージは床に寝転ぶ。ベットは占領されているようなものだ。

「……………」

自分の手を見つめながら、シュージは考える。

（オレは……何をやるべきなんだろう？）

答えは簡単には出なかった。ふとベットの上のミイナを見る。穏やかな表情で眠るミイナ。彼女は何も知らない。知るべきではない。

「……………」 オレは」

まだ……答えは出なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0788s/>

---

ゼロエターナル・オンライン

2011年7月24日03時39分発行